戎畑遺跡発掘調査報告書

土地区画整理事業に伴う95－1区の調査

泉南市文化財調査報告書　第四十五集

2005. 3

泉南市教育委員会

序　　文

泉南市は、和泉山脈と大阪湾に抱かれた、豊かな自然環境を有する風光明媚なまちであります。自然の恩恵を授かり育くまれた先人の足跡は、多くの埋蔵文化財となって大地に刻みこまれています。しかしながら近年の開発の増加は、そうした埋蔵文化財のみならず、自然環境にも少なからずの影響を与え、まちの景観や風土も大きく変化を遂げようとしています。

本書において報告いたします戎畑遺跡の発掘調査では、予想だにしなかった多くの成果が得られました。特に、海岸近くに営まれた中世の集落の一端が明らかとなったことが注目されます。多くの遺構や遺物を通して、かつてここに暮らした人々が海と共にあったことを、私たちは知ることができます。

多くの調査成果によって導き出される歴史的情報は、泉州地域の成り立ちを考えるうえで、欠かせないものであると自負いたします。今後はこれらの歴史的情報をさらに最大限活用してまいる所存でございます。

文末ではございますが、調査に際しご援助、ご協力、ご理解を賜りました樽井八反農住組合ならびに近隣住民の皆様、さらに多くの関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも本市文化財保護行政にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年３月

泉南市教育委員会
教育長　梶本邦光

例　　言

1．本書は、樽井４－89他27筆における土地区画整理事業に伴い、泉南市教育委員会が実施した戎畑遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は、樽井八反農住組合（組合長理事戎野博太郎）による埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の届出を受けて実施した。試掘及び発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。
試掘調査　担当者　岡　一彦　調査期間　平成７年７月26日～同８月１日
発掘調査　担当者　城野博文　調査期間　平成８年２月23日～同10月７日

3．現地調査に要する費用は、樽井八反農住組合が負担した。

4．調査及び整理にあたって、多くの方々から御教授、御協力を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表する。（五十音順、敬称略、組織名等は調査時のもの）
井藤暁子、乾　哲也、上野　仁、尾上　実、久世仁士、後藤完二、近藤康司、鈴木陽一、田中早苗、田中一廣、中川義朗、橋本久和、廣瀬和雄、前川浩一、前田洋子、松本堅吾、水野正好、南川孝司、三好義三、向井俊生、森村健一、山川邦男、吉岡康暢
大阪府下埋蔵文化財研究会、泉南歴史研究会、泉南市農業協同組合、株式会社竹口文化財、株式会社アコード

5．調査及び整理にあたって、次の諸君らの参加を得た。
植田哲也、江尻美代子、大多和　恵、奥田　桂、小野　泉、蒲生徹幸、河村公美子、木村啓之、蔵田弘幸、下尻順子、田上信一、竹内伸一朗、玉置由紀、土井明彦、徳永素子、富　愛、中谷めぐみ、浜口浩美、廣岡隆憲、福井元気、藤野　渉、松下　隆、真鍋紀美子

6．本調査内容については、下記において概要を記したことがある。遺構解釈等において、本書と内容が異なる場合は、本書をもって正報告とする。
「泉南市戎畑遺跡の調査」『第35回大阪府下埋蔵文化財研究会資料集』(財)大阪府文化財調査研究センター（1997）

7．本書の執筆、編集は城野が行った。

8．調査における出土遺物および写真、図面等の諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本書で扱う基準高はT.P.（東京湾平均海水位）である。

2．遺構配置図および平面図には、国土座標第Ⅵ系を用い、図上の方位はすべて座標北を表す。また本書における座標値はすべて調査時におけるもので、測地系2000には対応していない。

3．遺物実測図の断面は、須恵器－黒塗り、黒色土器－トーン、その他は白抜きとした。ただし瓦器及び瓦質土器については遺物番号の横に「瓦」と表記している。

4．遺物挿図、図版において遺物番号は統一している。

目　　次

第１章　調査に至る経過……1
　第１節　調査に至るまで……1
　第２節　調査の方法……2
第２章　周囲の環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……4
第３章　調査の成果……7
　第１節　基本層序……7
　第２節　掘立柱建物……10
　第３節　地鎮遺構……19
　第４節　井戸……20
　第５節　土坑……21
　第６節　焼成土坑……37
　第７節　窯……42
　第８節　採掘土坑……46
　第９節　溝……50
第４章　まとめ……58

挿　図　目　次

第１図　泉南市の位置……1
第２図　戎畑遺跡位置図……2
第３図　調査区の地区割り……3
第４図　調査区周辺地形図……4
第５図　周辺の遺跡分布図……5
第６図　層序模式図……7
第７図　包含層出土遺物……8
第８図　上層遺構平面図……9
第９図　掘立柱建物１平面図及び断面図……10
第10図　掘立柱建物出土遺物……11
第11図　掘立柱建物２平面図及び断面図……12
第12図　掘立柱建物３平面図及び断面図……13
第13図　掘立柱建物４平面図及び断面図……14
第14図　掘立柱建物５平面図及び断面図……15
第15図　掘立柱建物６平面図及び断面図……16

第16図　掘立柱建物７平面図及び断面図……17
第17図　掘立柱建物８平面図及び断面図……17
第18図　掘立柱建物９、構２平面図及び断面図……18
第19図　掘立柱建物10平面図及び断面図……19
第20図　掘立柱建物11平面図及び断面図……20
第21図　地鎮遺構１平面図及び立面図……21
第22図　地鎮遺構１出土遺物……21
第23図　地鎮遺構２平面図……22
第24図　地鎮遺構２出土遺物……22
第25図　井戸平面図及び断面図……23
第26図　井戸出土遺物……24
第27図　土坑１平面図及び断面図……25
第28図　土坑１出土遺物……25
第29図　土坑２、３平面図及び断面図…… 26
第30図　土坑２、３出土遺物…… 27
第31図　土坑４平面図及び断面図……28
第32図　土坑４出土遺物……29
第33図　土坑５平面図及び断面図……30
第34図　土坑５出土遺物……31
第35図　土坑６、７平面図及び断面図…… 32
第36図　土坑６、７出土遺物…… 33
第37図　土坑８平面図及び断面図……34
第38図　土坑８出土遺物……34
第39図　土坑９、10、11平面図及び断面図……35
第40図　土坑９出土遺物……36
第41図　土坑10、11出土遺物…… 36
第42図　土坑12平面図及び断面図……37
第43図　土坑13平面図及び断面図……37
第44図　土坑12、13出土遺物…… 38
第45図　焼成土坑１平面図及び断面図……39
第46図　焼成土坑２平面図及び断面図……40
第47図　焼成土坑２出土遺物……41
第48図　焼成土坑３平面図及び断面図……42
第49図　焼成土坑４平面図及び断面図……43
第50図　焼成土坑１、２、３、４出土遺物…… 44
第51図　焼成土坑５平面図及び断面図……45
第52図　焼成土坑５出土遺物……46

第53図　窯１、２……47
第54図　窯１、２出土遺物……48
第55図　採掘土坑１平面図及び断面図……50
第56図　採掘土坑１、２出土遺物①……51
第57図　採掘土坑１、２出土遺物②……52
第58図　溝１～６及び欅１……54
第59図　溝１出土遺物……55
第60図　溝２、３、５、６出土遺物……56

写　真　目　次

写真１　現地説明会……1

表　目　次

第１表　遺構名対照表……3
第２表　戎畑遺跡における発掘調査一覧……6
第３表　掘立柱建物及び溝の軸方向……58

図　版　目　次

ＰＬ．１　調査区全体図
ＰＬ．２　調査区垂直写真
ＰＬ．３　調査区全景①
ＰＬ．４　調査区全景②
ＰＬ．５　調査区全景③
ＰＬ．６　調査区全景④
ＰＬ．７　上層遺構・掘立柱建物①
ＰＬ．８　掘立柱建物②
ＰＬ．９　掘立柱建物③
ＰＬ．10　掘立柱建物④・地鎮遺構・井戸・土坑①
ＰＬ．11　土坑②
ＰＬ．12　土坑③
ＰＬ．13　土坑④
ＰＬ．14　土坑⑤
ＰＬ．15　土坑⑥・焼成土坑①
ＰＬ．16　焼成土坑②・窯①

PL.17　窯②
PL.18　窯③・採掘土坑①
PL.19　採掘土坑②・溝①
PL.20　溝②
PL.21　出土遺物①
PL.22　出土遺物②
PL.23　出土遺物③
PL.24　出土遺物④

戎畑遺跡発掘調査報告書

第１章　調査に至る経過

第１節　調査に至るまで

戎畑遺跡の所在する泉南市は、大阪府南部に位置し、泉州南部、いわゆる泉南地域に属する。大都市圏に接しながら、田園風景と旧村の織り成す中世以来の光景を、今もなお良く残す地域である。

ところが近年は、関西国際空港の開港に代表される大小様々な開発が急激に増加し、地域の景観が大きく変貌しようとしている。特に高速道路や主要幹線道路などの交通網が整備されたことによる生活圏の拡大に伴い、大都市近郊のベットタウンとして住宅都市化が進んでいる。

第１図　泉南市の位置

このような状況のもと、平成６年に樽井八反農住組合による樽井４－89他における土地区画整理事業が計画された。事業は対象面積が20,760㎡に及ぶ大規模なもので、かつ周知の埋蔵文化財包蔵地である戎畑遺跡に含まれることから、市教育委員会では事業者との間で、対象地における埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。協議においては、事前に包含層の有無、遺構面の拡がり等を把握する必要があるとの認識で一致し、平成７年８月に事業地全域を対象とする試掘調査を実施した。試掘調査の結果、全域に良好な包含層及び遺構面が拡がっていることが予想されるに至り、これをうけた再度の協議において、対象地のうち道路敷き部分及び共同住宅予定地を対象とする全面的な発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は平成８年２月23日より10月７日まで行われ、総調査面積は約5,245㎡である。

調査が進展するにつれて、試掘調査の結果をも大きく上回る遺構、遺物が確認されることとなり、周辺には非常に良好な遺構面が拡がっていることが明らかとなった。特にⅡ区において、掘立柱建物や土坑墓、焼成土坑、窯といった中世の集落遺構、生産遺構がまとまって確認されたため、その成果を広く市民に公開するべく、９月17日には報道発表を行い、同21日には現地説明会を開催し、多くの市民の参加を得た。

写真１　現地説明会

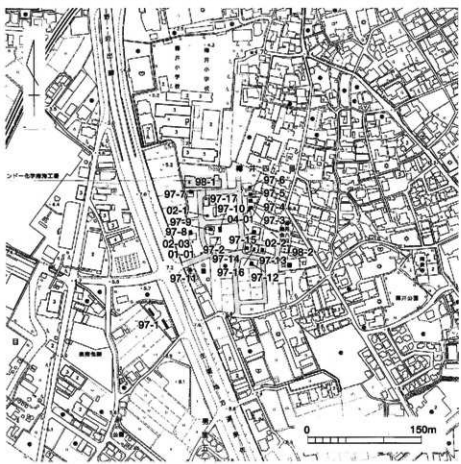
第２節　調査の方法

調査は、対象地のうち現況水路及び一部に設置されていた擁壁部分を除いて実施した。現況では、全域が耕作地であったことから、あらかじめ耕作土を除去、搬出した後に、耕作土に伴う床土をバックホーにて掘削し、以下を人力掘削の対象とした。

掘削土の場外への搬出が困難であったため、調査区を南北に大きく２つに分け、北側をⅠ区、南側をⅡ区とし、Ⅰ区の調査終了後、反転してⅡ区の調査を実施した。また調査区が道路予定地であることから、便宜上、Ⅰ、Ⅱ区共に小調査区を設定した。Ⅰ区は共同住宅部分をＡ区とし、住宅本体をＡ１区、受水槽及び機械室部分をそれぞれＡ２区、Ａ３区とした。また道路敷部分はＢ区とし、各道路の交点を基準として北から反時計回りにＢ１～Ｂ４区を設けた。このうちＢ２区及びＢ４区については、Ⅱ区にもその一部が含まれるため、それらについてはⅡ－Ｂ２区、Ⅱ－Ｂ４区とした。Ⅱ区についてはＣ区とし、道路敷の交点を基準として、北東から時計回りにＣ１区～Ｃ５区を設けた。

遺物の取上げ及び遺構の記録作成にあたっては、調査区全体に国土座標Ⅳ系に基づく５ｍ四方のグリッドを設定して行った。大阪府都市計画１／2500地形図に準拠し、地形図の区割り（2000ｍ×1500ｍ）を、500ｍ×500ｍの大区画に12分割し、それぞれＡ～Ｌの記号を付ける。大区画をさらに100ｍ×100ｍの中区画に25分割し、それぞれ１～25までの番号を付ける。さらに中区画を５ｍ×５ｍの最小区画に分割し、Ｘ軸はＡ～Ｔ、Ｙ軸は１～20までの記号番号を付ける。各グリッドは、グリッド北西のＸＹ交点の記号番号をもって呼称される。

遺構登録は、Ⅰ区については001番、Ⅱ区は201番より始まる固有の遺構番号を与え、番号の前に遺構種別を表す記号を付した。記号はＳＢ＝掘立柱建物、ＳＫ＝土坑、ＳＤ＝溝、ＳＸ＝性格不明遺構などを表す。ピットについては小調査区



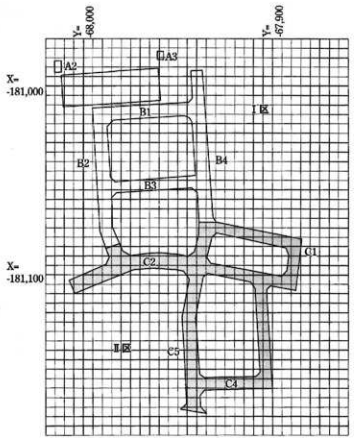
第２図　戎畑遺跡位置図

毎の通し番号を付している。最終的に登録された遺構の数は、ピットを除く遺構が358基、ピット893基を数える。なお本書にて報告する遺構名称は登録された各遺構番号とは異なっており、それぞれの対照は下表のとおりである。

平面図の作成は航空写真測量による1／20図化を基本とし、必要に応じて、随時実測図を作成した。

整理作業は現地調査の終了後、引き続いて断続的に行い、本書の刊行に至っている。

掲載する出土遺物のうち、土坑11より出土した和鏡及び木製品、採掘土坑1より出土した漆容器については平成10年度に保存処理処置を行っており、本書にて取り扱う法量その他は、すべて処理後の状態を示している。



第3図　調査区の地区割り

第1表　遺構名対照表

本書における名称	検出地区	登録番号	本書における名称	検出地区	登録番号
掘立柱建物1	A1	SB52	土坑8	II－B4	SX31
掘立柱建物2	B1	SB53	土坑9	C5	SX217
掘立柱建物3	I－B4	SB54	土坑10	C5	SX234
掘立柱建物4	I－B4	SB55	土坑11	C5	SX283
掘立柱建物5	I・II－B4	SB56・307	土坑12	C4	SX244
掘立柱建物6	C1	SB291	土坑13	C4	SX（SK）243
掘立柱建物7	C1	SB292	焼成土坑1	A2	SK10
掘立柱建物8	II－B2	SB290	焼成土坑2	B1	SK02
掘立柱建物9	II－B2	SB288	焼成土坑3	B1	SK11
掘立柱建物10	C5	新規	焼成土坑4	B3	SK26
掘立柱建物11	C5	新規	焼成土坑5	C3	SK219－B
柵1	C2	SB309	溝1	C5	SX224
柵2	II－B2	SB288の西端柱列	溝2	C5	SX223
地鎮遺構1	C5	C5－Pit130	掘削土坑1	C5	SX201
地鎮遺構2	C5	C5－Pit69	採掘土坑2	C5	SX230
井戸	C1	SX259（井戸③）	溝1	A3・A1 B1・B2	SD01
土坑1	B1	SK29			
土坑2	I－B4	SK24	溝2	C2	SD232
土坑3	I－B4	SK25	溝3	I－B2	SD30
土坑4	B2	SK35A・B・C	溝4	I－B4	SD42
土坑5	II－B2	SX（SK）38	溝5	I－B4	SD32
土坑6	II－B2	SX（SK）253	溝6	I－B4	SD33
土坑7	II－B2	SX255			

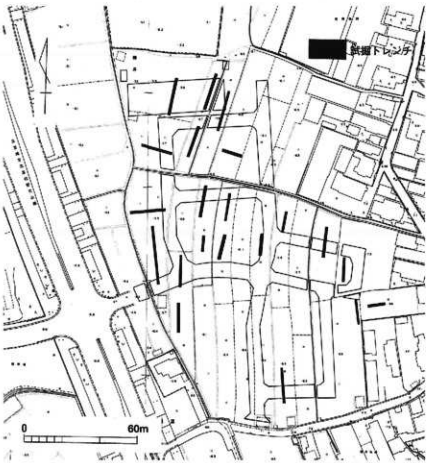
第２章　周囲の環境

第１節　地理的環境

地形的に市域を概観すると、市の南側約半分を基盤山地である和泉山脈が占める。基盤山地からは樫井川と男里川が蛇行しつつ北流し、これら河川の間には基盤山地より派生する丘陵が舌状に伸びる。

丘陵に挟まれるようにして、洪積段丘が高位から中位、低位へと階段状に形成されている。市域では低位段丘部分が最も広く、現在の市街中心部を含む。

河川の周囲には沖積地が発達している。沖積地は現在の河道に沿って自然堤防を形成し、氾濫原及び谷底平地と続き、さらに洪積段丘の縁辺部に沿うように沖積段丘を形成している。



第４図　調査区周辺地形図

戎畑遺跡は地形的に、男里川右岸に形成された沖積地に立地する。その大半を氾濫原及び谷底平地が占め、遺跡南西隅に旧河道が、遺跡東縁部分に沖積段丘が分布する。現況における調査地の標高は、６ｍ前後であり、南から北西に向かって緩やかに傾斜している。また調査区より東へ約200ｍには、比高４～５ｍを測る明瞭な段丘崖が形成されており、遺跡の東端を限る。

第２節　歴史的環境

市域における遺跡の分布は、両河川の周囲に集中しており、樫井川流域では低位段丘上に、男里川流域では河道右岸の沖積地に集中する。低位段丘の中心部分においては、遺跡の分布は疎である。男里川右岸に分布する多くの遺跡のうち、戎畑遺跡の南に接する男里遺跡を除けば、周辺での調査例はさほど多くはない。特に戎畑遺跡においては本調査以前には本格的な発掘調査が行われたことはなかった。ここでは戎畑遺跡周辺の調査成果を概観し、遺跡の歴史的環境を粗描し

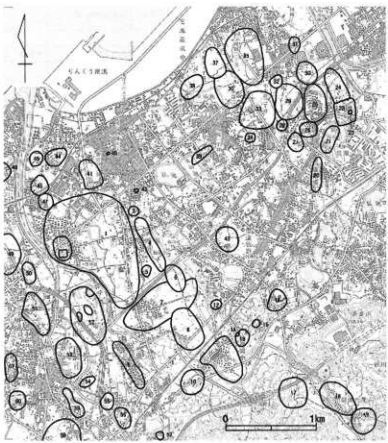
てみたい。

男里遺跡は、旧石器時代より近現代に至る複合遺跡であり、中でも弥生時代中期後葉に展開する集落は、地域の拠点的な集落であると位置づけられる①。古代以降、中世に及ぶ遺構、遺物も多く確認され、各時代毎の詳細な分布も語られつつある。

平安時代においては、男里遺跡の北東端部、本調査区より南へ約200mの地点において、10世紀後半代の掘立柱建物や廃棄土坑②が確認されている。また男里遺跡の北西端部においても平安時代の掘立柱建物や土坑③がまとまって確認されている。さらに平安時代末期から鎌倉時代には男里遺跡④や光平寺跡⑤において瓦が多く出土し、中世前半の遺構、遺物の分布と併せて寺院を伴う複数の集落範囲が想定されている⑥。

幡代遺跡では、現集落よりやや東側の地点において、13世紀代の掘立柱建物群⑦が確認されており、さらに南側、熊野街道沿いに発達したと考えられている岡中遺跡⑧や岡中西遺跡⑨においても13世紀中頃から15世紀に至るまでの遺構、遺物が確認されている。

こうしたことから男里川右岸に展開する遺跡群においては、平安時代末より中世にかけて発展した集落は、基本的に現在みられる集落に繋がるものであると考えられる。今後、それぞれの集落内での調査が進めば、現在みられるような集村形態への移行の過程をトレースすることも可能であろう。



1	男里遺跡	22	海会寺跡	43	上代石塚遺跡		
2	光平寺跡	23	海会寺瓦窯	44	天神の森遺跡		
3	男里東遺跡	24	一岡神社遺跡	45	キレト遺跡		
4	長山遺跡	25	北野遺跡	46	高田遺跡		
5	山ノ宮遺跡	26	大前代遺跡	47	男里北遺跡		
6	前田池遺跡	27	仏性寺跡	48	櫻島遺跡		
7	幡代遺跡	28	中小路南遺跡	49	馬川遺跡		
8	幡代東遺跡	29	中小路遺跡	50	下出北遺跡		
9	高田山古墳群	30	新伝寺遺跡	51	堂堂遺跡		
10	岡中西遺跡	31	岡田東遺跡	52	平野寺（長崎寺）跡		
11	岡中遺跡	32	中小路北遺跡	53	向出遺跡		
12	奥ノ池遺跡	33	中小路西遺跡	54	高田西遺跡		
13	林昌寺跡	34	坊主池遺跡	55	高田南遺跡		
14	林昌寺瓦窯跡	35	岡田遺跡	56	和泉鳥取遺跡		
15	林昌寺新郷出土地	36	岡田西遺跡	57	南山遺跡		
16	信之池遺跡	37	氏の松遺跡	58	向山遺跡		
17	淺瀬遺跡	38	座頭池遺跡	59	自然田遺跡		
18	六尾遺跡	39	本田池遺跡	60	西畑遺跡		
19	六尾南遺跡	40	専徳寺遺跡	61	正方寺跡		
20	市場遺跡	41	沈畑遺跡				
21	海雲宮池遺跡	42	樽井南遺跡				

第5図　周辺の遺跡分布図

男里遺跡では先にみた遺跡北西縁部の調査において、13世紀から14世紀代に属する多くの真蛸壺焼成土坑[10]が確認され、1基の有孔式平窯も確認されている。同様の焼成土坑は、樽井南遺跡[11]、新伝寺遺跡[12]において確認されており、ほかに阪南市田山遺跡[13]、田山東遺跡[14]、馬川遺跡[15]、箱作今池遺跡[16]、泉佐野市上町東遺跡[17]、湊遺跡[18]などにおいても報告例がある。10世紀後半から11世紀のものとされる湊遺跡例を除けば、いずれも中世に属するものであり、集落内における真蛸壺生産は、当該期の南泉州地域において普遍的な光景であったものと捉えることができる。

第2表　戎畑遺跡における発掘調査一覧

調査区	遺　構	遺構からの遺物	備　考	文献
95－1				本書
97－1	掘立柱建物、溝	－	3b期、2b期相等面において確認。遺跡範囲の拡大。	③
97－2	－	－		③
97－3	焼成土坑、溝	土師器、黒色土器AB、窯体		③
97－4	－	－		③
97－5	－	－		③
97－6	土坑	瓦器椀		③
97－7	土坑、小穴	－	植物痕か。	③
97－8	溝	－	溝1延長か。	③
97－9	小穴	－		③
97－10	土坑、ピット	－		③
97－11	ピット	瓦器椀		③
97－12	ピット、植物痕			③
97－13	焼成土坑、溝、ピット	土師質真蛸壺、土師		③
97－14	土坑、ピット			③
97－15	溝、土坑、ピット	黒色土器、瓦器	溝6延長か。	③
97－16	－	－		③
97－17	植物痕			③
98－1	土坑、ピット	－		③
98－2	ピット、小穴	－		③
01－1	溝	－	溝1延長か。	③
02－1	土坑	瓦器椀、土師質鍋、土釜、真蛸壺		③
02－2	－	－		③
02－3	溝、ピット	－		③
04－1	ピット	－		③

なお、戎畑遺跡では本調査以降、同区画内における個人住宅等に伴う調査を中心に、現在まで第2表のとおり調査が実施されている。

註　① (財)大阪府文化財調査研究センター『男里遺跡発掘調査資料集』(2001)
② (財)大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1994)
③ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
④ (財)大阪府文化財調査研究センター『男里遺跡発掘調査資料集』(2001)
泉南市教育委員会『男里遺跡99－4区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅶ』(2000)
⑤ 泉南市教育委員会『光平寺跡93－2区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅱ』(1995)
泉南市史編纂委員会『古代の泉南』『泉南市史通史編』(1987)
⑥ 大阪府教育委員会『既往の調査』『男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』(2002)
大阪府教育委員会『遺跡の環境』『男里遺跡発掘調査概要・Ⅷ』(2004)
⑦ 泉南市教育委員会『幡代遺跡03－3区の調査』『新伝寺遺跡91－1区・幡代遺跡03－3区発掘調査報告書』(2004)
⑧ 泉南市教育委員会『岡中遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』(1988)
⑨ 泉南市教育委員会『岡中西遺跡』『泉南市文化財年報No.1』(1995)
(財)大阪府埋蔵文化財協会『岡中西遺跡』(1988)
⑩ ③と同じ。
⑪ 泉南市教育委員会『樽井南遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅳ』(1997)
⑫ 泉南市教育委員会『新伝寺遺跡91－1区の調査』『新伝寺遺跡91－1区・幡代遺跡03－3区発掘調査報告書』(2004)
⑬ (財)大阪文化財センター『田山遺跡』(1983)
⑭ 阪南市教育委員会『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅹ』(1995)
⑮ 阪南市教育委員会『馬川遺跡－94－4区－』(2001)
⑯ 阪南町教育委員会『阪南町埋蔵文化財発掘調査概要Ⅳ』(1989)
⑰ (財)大阪府埋蔵文化財協会『中開遺跡Ⅲ・上町東遺跡』(1994)
⑱ 泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅸ』(1989)
⑲ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅴ』(1998)
⑳ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅵ』(1999)
㉑ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅸ』(2002)
㉒ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅹ』(2003)
㉓ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅺ』(2004)
㉔ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ Ⅻ』(2005)

第３章　調査の成果

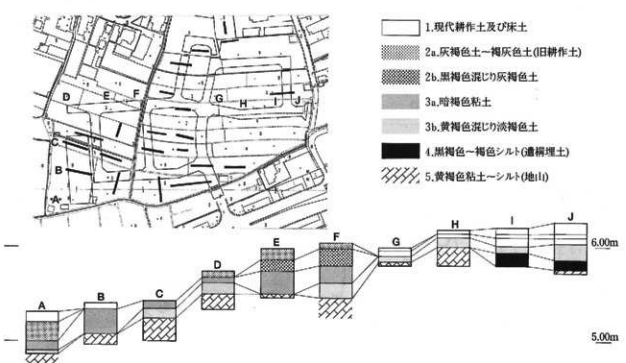
第１節　基本層序

１．基本層序（第６・７図）

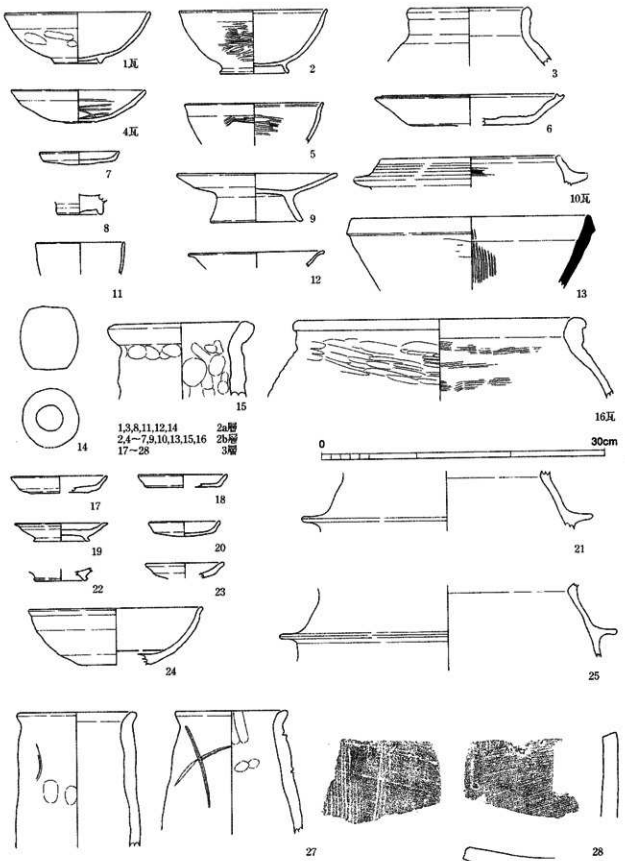
調査により確認された層序は基本的には共通している。確認された層序のうち、代表的な地点を抽出し、地点毎の層位及び地山の関係を模式的に図示したものが第６図である。

調査では、あらかじめ現代の耕作土を場外に搬出、耕作土に伴う床土層を機械掘削にて除去し、以下について人力掘削の対象としたが、地点によっては耕作土（1a層）や床土（1b層）が残る箇所もある。２層は旧耕作土である。調査区の北半部において確認された。2a層は灰褐色土～褐灰色土よりなる。2b層は黒褐色混じり灰褐色土よりなり、2a層による耕作時に下層の３層が攪拌されて形成されたものと捉えることができる。2a、b層ともに11世紀代から中世にかけての遺物を多く含み、中には古瀬戸前期Ⅳに位置づけられる卸皿（６）などがあるが、2a層より染付椀が出土していることから、共に近世期の形成であると考えられる。

３層は基本的には２層直下に拡がっているが、２層の堆積が確認されなかった調査区南半部では１層直下において確認された。上面の標高は5.0～6.1mを測り、北西に向かって緩やかに傾斜している。３層はさらに２つに分けることができ、上層の3a層が暗褐色土～シルト、下層の3b層が黄褐色混じり淡褐色土である。調査区南半部においては、3a層は確認されなかった。３層からは土師器や紀伊型土釜、土師質真蛸壺、平瓦などが出土しており、これらによって３層の形成は概ね14世紀以降であると考えられる。また後述するように、今回の調査では３層上面の耕



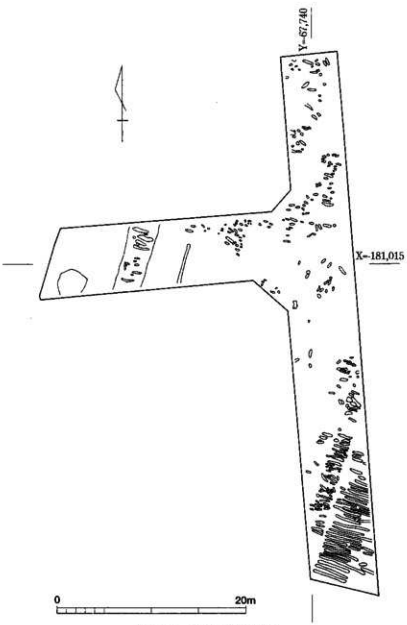
第６図　層序模式図


1瓦
2
3
4瓦
5
6
7
8
9
10瓦
11
12
13
14
15
16瓦
1,3,8,11,12,14 2a層
2,4~7,9,10,13,15,16 2b層
17~28 3層
0
30cm
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

第7図　包含層出土遺物

作痕を除けば、すべての遺構は3b層直下の地山上面において確認されたが、3b層が地山である黄褐色粘土と3a層が攪拌されたと考えられるものであることを考えると、本来の生活面は3b層の上面であった可能性がある。調査時においても、上記の観点より3b層上面において遺構検出に努めたが、遺構埋土が3層と極近似することもあり、明確な遺構を確認することはできなかった。

3層直下に地山である黄褐色粘土～シルトが拡がる。上面の標高は4.8～5.7mを測り、やはり北西に向かって緩やかに傾斜するものである。上面において、掘立柱建物や土坑、焼成土坑など、多くの遺構が確認された。



第8図　上層遺構平面図

2．上層遺構

（第8図、PL．7）

ほとんどの遺構は地山上面において確認されたことはすでに述べたとおりであるが、3層上面においても多くの遺構が確認された。特にB4区において明確に確認することができたもので、長さ1.0～4.0m、幅0.2～0.3m、深さ0.05m前後の溝が、おおよそW-25°-N、南東から北西へ向かって伸びている。埋土は第2層、旧耕作土である。

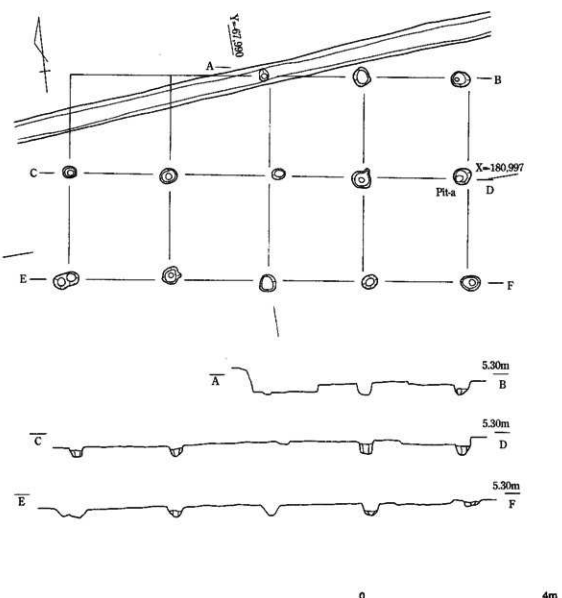
これらは耕作に伴う耕作痕、いわゆる畝溝であり、2層により近世の耕作痕であると考えられる。それぞれの溝の方向が、現在の地割と直交するものであることから、調査区周辺では近世以降、現在まで土地利用や地割に大きな変化がなかったものと考えられる。また耕作痕はいくつかの緩やかなまとまりをもって分布しており、地割の小単位を示すものと考えられる。

第２節　掘立柱建物

地山上面において確認された多くのピットのうち、柱通りや遺構規模、埋土の状況などから、11棟の掘立柱建物を抽出した。これらの中には、調査時より掘立柱建物として認識されていたものや、今回新たに掘立柱建物として認定したものがある。特にＣ５区において顕著であるが、調査では他にも数多くのピットが確認されており、提示した以外の掘立柱建物が存在する可能性は高い。

１．掘立柱建物１（第９・10図、ＰＬ．７・21）

Ａ１区中央北端において確認された桁行４間（約9.0m）、梁行２間（約4.6m）、面積41.6



第９図　掘立柱建物１平面図及び断面図

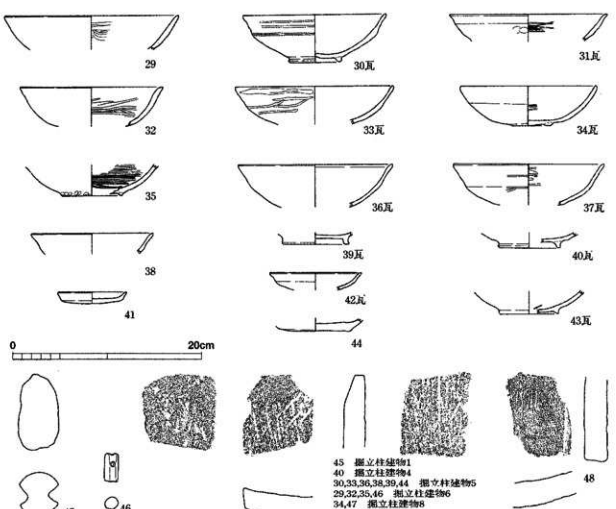
㎡の総柱建物である。東西棟であり、棟方向はW－10°－Nへ向ける。ピットは径0.25～0.35mの円形もしくは不整円形を呈し、深さ0.3～0.4mを測る。径0.1～0.15mの柱痕跡が確認された。遺物はPit- aより土錘が出土している。土錘（45）は手ぐすねによる長さ8cm×最大幅4cmを測るラグビーボール状の粘土塊の両側面に、幅2cm、深さ1cmの溝を設ける。

2．掘立柱建物2（第11図、ＰＬ．7）

Ｂ1区東半部で確認された桁行3間（約5.5m）、梁行1間（約2.7m）、面積14.85㎡の建物である。北端が調査区外へと伸びるが、南北棟になるものと考えられる。棟方向はN－6°－Eへ向ける。ピットは径0.3m前後の円形を呈し、深さ0.15～0.2mを測る。径0.1～0.15mの柱痕跡が確認された。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

3．掘立柱建物3（第12図、ＰＬ．7）

Ｂ4区南東部において確認された桁行4間（約8.1m）、梁行3間（約7.3m）、面積59.13㎡を測る総柱建物である。南北棟であり、棟方向はN－12°－Eへ向ける。南端柱列については柱通



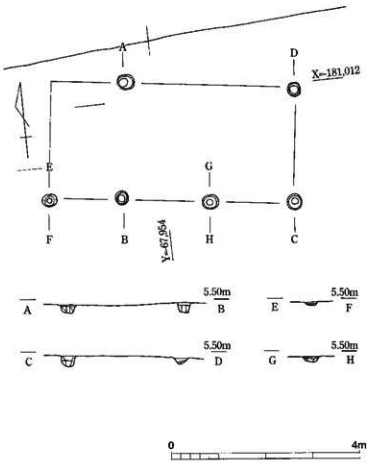
第10図　掘立柱建物出土遺物

りがやや悪い。ピットは径0.5m前後の方形もしくは楕円形を呈するものと、径0.3m前後の円形を呈するものがあり、一定しない。深さは0.15～0.25mを測る。径0.1～0.2mを測る柱痕跡を伴うものが多い。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

4．掘立柱建物4

（第10・13図、PL．8・21）

B4区南端部において確認された桁行2間（約4.6m）、梁行1間（約2.0m）、面積9.2㎡を測る建物である。東西棟であり、棟方向はW-10°-Nへ向ける。ピットは径0.2～0.3mの円形を呈し、深さ0.1～0.2mを測る。径0.1mの柱痕跡を伴うものが多い。このうちPit-aより遺物が出土した。40は瓦器椀である。断面台形を呈するしっかりとした高台を有する。



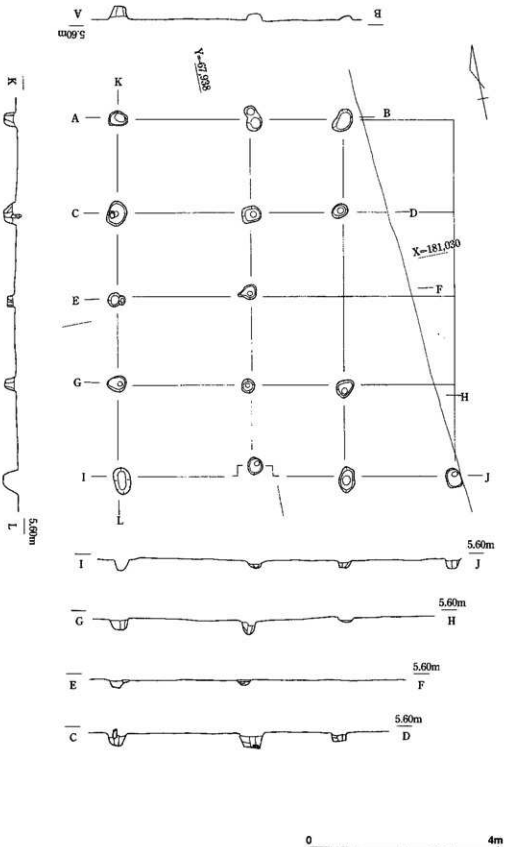
第11図　掘立柱建物2平面図及び断面図

掘立柱建物4の北と南にそれぞれ溝5、6があり、それぞれのほぼ中間の距離に掘立柱建物4は位置している。また溝の方向と棟方向の方向が概ね合致することから、互いに関連する遺構である可能性がある。

5．掘立柱建物5（第10・14図、PL．8・21）

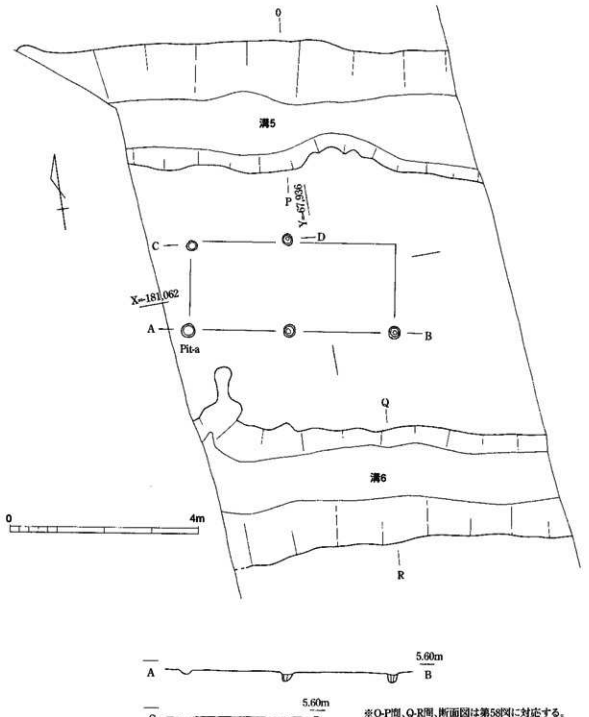
B4区南端部において確認された桁行4間（約8.0m）、梁行3間（約6.6m）、面積52.8㎡を測る総柱建物である。北東隅及び南西隅が調査区外へと拡がるものの、ほとんどのピットを確認することができた。南北棟であり、棟方向はN-10°-Eに向ける。ピットは径0.2～0.4mの円形を呈するものと、径0.5mの楕円形を呈するものがある。深さは0.1m程度のものがほとんどであるが、深さ0.3mを測るものもある。径0.1mを測る柱痕跡を伴う。このうちPit-a、bより遺物が出土した。30、33、38、39瓦器椀である。30と33は体部外面に強いナデを施し、さらにヘラミガキを加えている。39には断面台形の高台が付く。44は土師器小皿である。底部に糸切り痕が認められる。

6．掘立柱建物6（第10・15図、PL．8・21）



第12図　掘立柱建物３平面図及び断面図

C１区北西部において確認された桁行５間（約10.5m）、梁行２間（約4.2m）、面積44.1㎡を測る総柱建物である。トレンチ形状とほぼ平行して確認され、南北方向にさらに伸びる可能性もある。ほとんど全てのピットを確認することができたが、東から３列目の北側柱は確認されなかった。また柱通りは比較的良好であるが、北側柱のうち東から２列目のピットのみ、やや南へ外れる。東西棟であり、棟方向はW−10°−Nに向ける。他と切り合いを有し、残存状態の悪い北西及び北東隅のピットを除いて、ピットには径0.25〜0.4mを測る円形のものと、径0.5mの楕



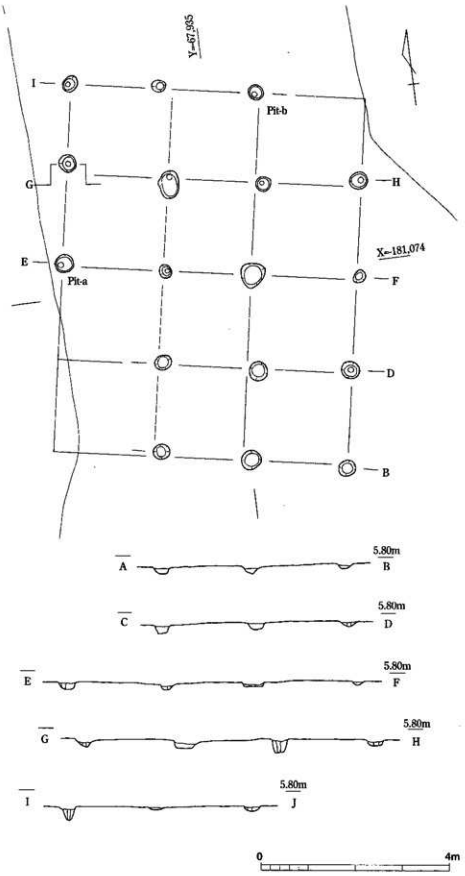
第13図　掘立柱建物４平面図及び断面図

円形を呈するものがあり、一定しない。深さは0.1～0.25mを測る。南東隅のピットにおいて径0.1mの柱痕跡が確認された。このうちPit-a、bより遺物が出土した。

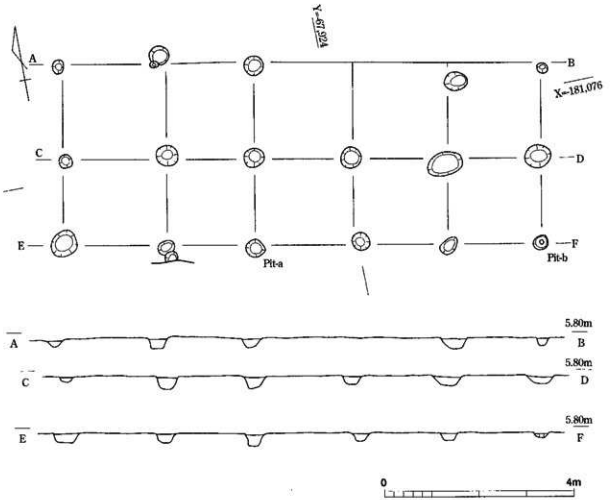
29、32、35は黒色土器の椀である。29はA類、32、35はB類である。いずれも内面にヘラミガキが認められる。35の高台外面にはヘラによって押圧した痕跡が残る。46は土錘である。棒状を呈し、表面は長軸方向に軽く面取りが施される。2ヵ所に穿孔が認められる。

7．掘立柱建物7（第16図、PL.8）

掘立柱建物6の東、約6mにおいて確認された桁行2間(約4.1m)、梁行1間(約2.55m)、面積10.46㎡を測る建物である。西側柱中央を除く



第14図　掘立柱建物5平面図及び断面図



第15図　掘立柱建物６平面図及び断面図

全てのピットが確認された。南北棟であり、棟方向はN−4°−Eに向ける。ピットは径0.3〜0.5mを測る円形または楕円形を呈する。深さは0.1〜0.2mを測る。いずれのピットにおいても柱痕跡は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

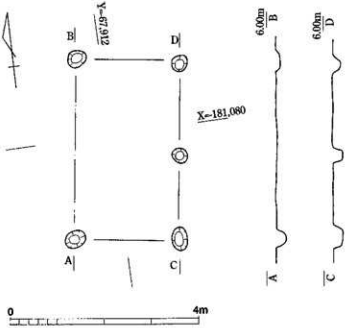
8．掘立柱建物８（第10・17図、ＰＬ．９・21）

Ｂ２区南部において確認された桁行３間（約5.5m）、梁行２間（3.9m）、面積21.45㎡を測る建物である。南西から北西にかけてのピットが、１基を除いて確認されなかった。北西側２間分については柱通りが良好である。東西棟であり、棟方向はN−40°−Wへ向ける。ピットは径0.3〜0.45mを測る円形のものと、径0.6mを測る楕円形のものとがある。いずれも深さ0.1〜0.2mを測る。西側２間分の範囲において、径0.1mの柱痕跡が確認された。このうちPit-a、bより遺物が出土した。34はPit-aより出土した瓦器椀である。低い断面方形の高台を有する。47は平瓦である。凹面に模骨痕、凸面にはハナレズナが認められる。

9．掘立柱建物９、欅２（第10・18図、ＰＬ．９・21）

Ｂ２区南端、掘立柱建物８の南東約３mにおいて確認された桁行６間（約12.8m）、梁行２

間（約4.9m）、面積62.72㎡を測る総柱建物である。東側柱列のほとんどがトレンチ外へと伸びるものの、トレンチにかかる範囲では全てのピットを確認することができた。南北棟であり、棟方向はN−10°−Wへ向ける。ピットは径0.3〜0.4mを測る円形または不整円形を呈するものが多いが、長径0.6〜0.7mの楕円形のものもある。深さ0.15〜0.25mを測る。径0.1〜0.15mの柱痕跡を有するものもある。Pit-aの底部には拳大の自然石が2つ認められた。31はPit-bより出土した瓦器椀である。体部内面にヘラミガキが施され、体部外面にはユビオサエの痕跡が残る。



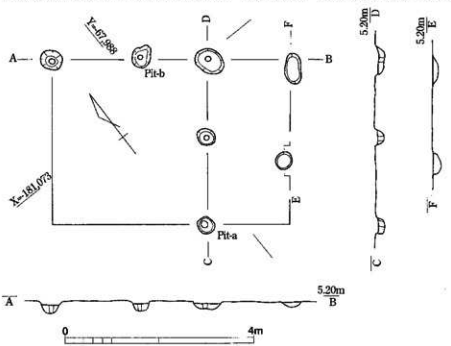
第16図　掘立柱建物7平面図及び断面図

掘立柱建物9西側柱列より西へ約0.9mの距離を隔てて、建物と平行に並ぶ柱列が8間分（約14.4m）にわたって確認された。柱間の間隔は心々間において1.6mのものと2.1mを測るものがあり、北から4間目から6間目までが広い。ピットは径0.2〜0.4mの円形または楕円形を呈する。深さ0.15〜0.2mを測る。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。この柱列については、掘立柱建物9の棟方向と完全に平行して伸びること、さらに中央3間分については建物との柱筋が通ることから、付随する庇であるとも考えられるが、南北両端がそれぞれ半間ずつ長く、かつ建物との距離が短いことから、ここでは柵もしくは塀であるとしておく。

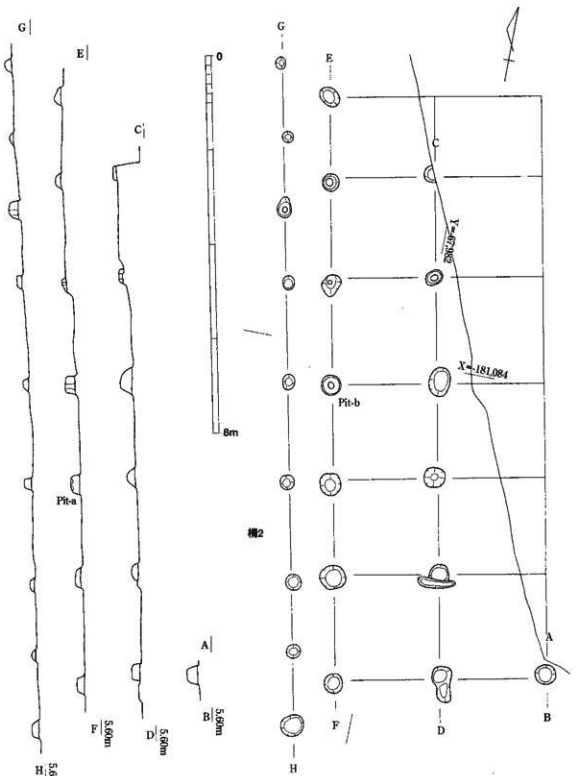
10. 掘立柱建物10

（第10・19図、PL. 9・21）

C5区北部において確認された桁行4間（約6.6m）、梁行2間（約3.6m）、面積23.76㎡を測る総柱建物である。南北棟であり、棟方向はN−10°−Wへ



第17図　掘立柱建物8平面図及び断面図



第18図　掘立柱建物９、棟２平面図及び断面図

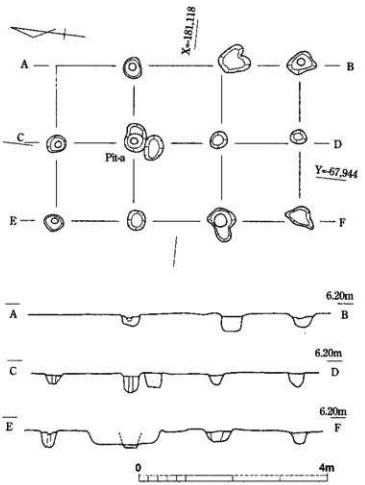
向ける。ピットは径0.3～0.4ｍの円形を呈するものと、長径0.5～0.7ｍを測る楕円形もしくは不整楕円形を呈するものがある。深さ0.2～0.3ｍを測る。柱痕跡は径0.15ｍ程のものが多いが、径0.25ｍを測るものもある。このうちPit-aより遺物が出土した。48は平瓦である。凹面に布目、

凸面には縄タタキ、ハナレズナが認められる。

11．掘立柱建物11

（第10・20図、ＰＬ．10・21）

Ｃ５区中央部、掘立柱建物10の南約６ｍにおいて確認された桁行５間（約10.4ｍ）、梁行２間（約4.9ｍ）、面積50.96㎡を測る総柱建物である。南東隅がトレンチ外へと伸び、さらに南西端は採掘土坑１と切り合う。南北棟であり、棟方向はＮ－10°－Ｗに向ける。ピットは径0.3～0.4ｍを測る円形のもののほか、長径0.4～0.6ｍを測る楕円形を呈するものがあり、中には長径1.2ｍを測るいびつな楕円形を呈するものもあり、平面形状、規模が一定しない。深さ0.1～0.25ｍを測る。径0.15ｍ前後の柱痕跡を伴うものがある。このうちPit-a、ｂ、ｃより遺物が出土した。41は土師器小皿である。体部から口縁部はナデによって仕上げられ、底部との境に緩やかな稜線を有する。37、43は瓦器椀、42は瓦器小皿である。37は内外面共にヘラミガキが施される。



第19図　掘立柱建物10平面図及び断面図

第３節　地鎮遺構

１．地鎮遺構１（第21・22図）

Ｃ５区中央部において確認された。直径0.45ｍ、深さ0.15ｍを測る円形を呈するピットである。掘方の東辺部分に、土師器の皿が重ねておかれ、中には銭貨が１枚おかれていた。

皿は全部で３枚あり、いずれも乳白色の精緻な胎土を持つ、いわゆる楳来の白土器と称されるものである。50は平底から直線的に立上がる体部からやや外反する口縁部へとつながる。口縁下部はナデにより緩やかな稜線を持つ。49と51は底部中央の窪んだへそ皿である。銭貨は劣化が著しく、文字の判読は不可能であった。

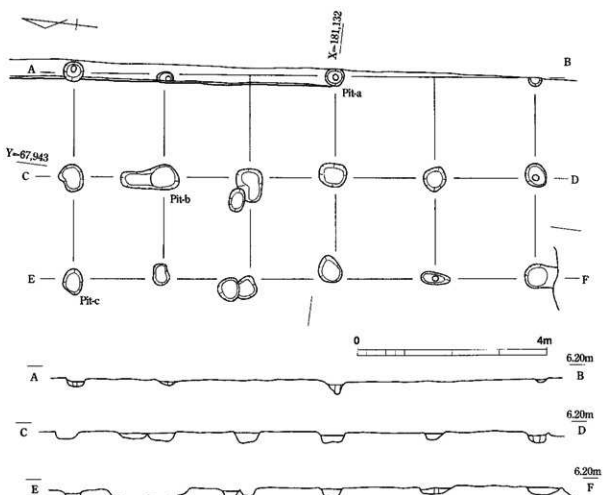
２．地鎮遺構２（第23・24図、ＰＬ．10・21）

Ｃ５区南端部において確認された。遺構東端はトレンチ外へと伸びるが、ほぼその全貌を知る

ことができた。直径0.45mの円形を呈するピットの内部に土師器小皿がぎっしりと詰込まれていた。皿はほとんどが表面を上に向けており、意図的に埋納されたものであると考えて間違いないだろう。遺物はすべて小皿であり、総重量は900gであった。これを完形、もしくは完形に近い小皿の平均固体重量（37.5g）で割ると24枚ということになる。ただし遺構がトレンチ外にも続くので、実際の埋納数は不明である。

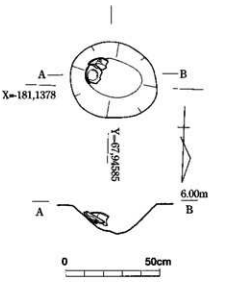
図示することができた小皿は21枚ある。体部に強い横ナデが施され、底部との境に稜線を持つものもあるが、多くのものは底部から内湾しつつ緩やかに立ち上がる。底部形態においても平底のもの、緩やかな曲線を描くもの、中央部が窪むものなどが認められる。口径6.6cmから8.3cmまでのものがあるが、7.0～7.5cmを測るものが最も多く9点あり、6.6～6.9cmを測るものが8点ある。ほかに直径12cm前後の皿が3点含まれていた。いずれも底部から緩やかに内湾しつつ立ち上がり、口縁端部はナデによってわずかに外反するものである。75は内面に煤が付着しており、灯明皿であると考えられる。

第4節　井戸（第25・26図、PL．10・21）



第20図　掘立柱建物11平面図及び断面図

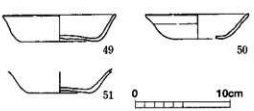
C１区北部中央において確認された素掘りの井戸である。長径3.9m、短径3.2m、深さ1.5mを測る。掘方は２段であり、深さ0.2m程で一度平坦面をなし、東端部の径2.5mを測る範囲がさらに深く掘り込まれている。断面形状は、北側はほぼ直線的に底辺に達するのに対し、南側は大きく外方向に向かって広がっており、掘削段階で拡張されたもののようである。底部は平坦である。埋土は７層に分かれるが、いずれも黄灰色系もしくは褐色系の土層であり、自然堆積したものでない。廃棄に際して、人為的に埋め立てられたものと考えられる。このうち埋土上位にあたる黒褐色土またはシルトには大量の円礫や遺物が含まれており、埋めるに際して廃棄されたものと考えられる。



第21図　地鎮遺構１平面図及び立面図

掘方上段の北西端からトレンチ外に向かって幅0.9～1.1mの溝が伸びており、全容が不明であるために明らかではないが、灌漑用途の井戸である可能性がある。

遺物には土師器坏、瓦器椀、土釜、瓦質土器鉢、甕、陶器鉢、土師質真蛸壺などがある。76は土師器坏、78、80は瓦器椀である。80の体部内面には圏線状のヘラミガキが施される。77、79は土師質土釜である。いずれも紀伊型であるが、77に比べて79は頸部から口縁部の屈曲の度合いが強い。81は瓦質土器鉢である。84は瓦質土器甕である。口縁端部に緩やかな面を持つ。83は陶器鉢の底部である。信楽か。85は土師質羽釜である。鍔より上が緩やかに内湾し、口縁端部は外にむかって丸く曲げられる。和泉Ｂｃ型。82は土師質真蛸壺である。体部と頸部の屈曲が明確でなく、内傾しつつ立上がる体部に直接外反する口縁部を有する。



第22図　地鎮遺構１出土遺物

これら出土遺物により、おおよそ13世紀末から14世紀以降に廃棄されたものと考えられる。

上記のほか、井戸の可能性がある遺構が２基確認されている。しかしながら、いずれも状況に大きな違いはなく、本調査においては集落に直接付随する井戸は未確認であると言えよう。

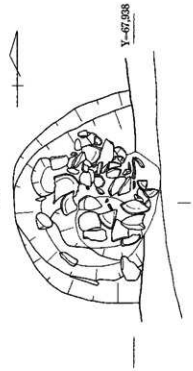
第５節　土坑

土坑（ＳＫ）もしくは不明土坑（ＳＸ）とした遺構はかなり多く、全部で300基を超える。それらすべてが人為的なものとは考えられず、多くは腐倒木など自然の営為によって形成されたものである。また以下には土坑墓や火葬墓などといった、その性格上別項を設けて報告すべきものも含まれている。しかしながら用途不明の土坑も多くあり、そうした中にも、土坑墓として設けられたものもあると考えられることから、ここでは全てを同列に扱い、報告する。ただし現時点において性格の明らかな遺構については、それぞれの用途を各項の後に表記した。

1．土坑1【土坑墓】（第27・28図、PL．10・21）

B1区中央部西よりにおいて確認された。長辺0.9～1.0m、短辺0.6m、深さ0.15～0.25mを測る隅丸長方形を呈する土坑である。長辺をN－25°－Eに向ける。断面形状は逆台形を呈し、底部は北から南へ傾斜する。土坑北西隅において瓦器椀（86）が伏せた状態で出土した。底部よりわずかに浮いてはいたが、大きく二次移動している可能性は少ない。

86は底部から広く開く体部にやや外反する口縁部がつく。体部内面には圏線状の、見込みには連結輪状のヘラミガキが施される。底部には低い高台を貼り付ける。ほぼ完形であるが、口縁端部にわずかな打ち欠きが認められる。13世紀前半に位置づけられるものである。

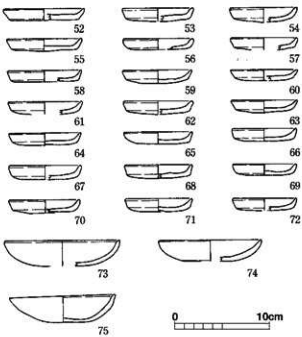


第23図　地鎮遺構2平面図

2．土坑2（第29・30図、PL．11・21）

B4区中央部において確認された。一辺2.0m、深さ0.1～0.15mを測る方形を呈する土坑である。おおよそ北に軸を向ける。断面形状は浅い皿状を呈し、底部は平坦である。埋土は基本的に黒褐色粘土であるが、底部に暗茶褐色粘土や淡黒褐色粘上がみられる。

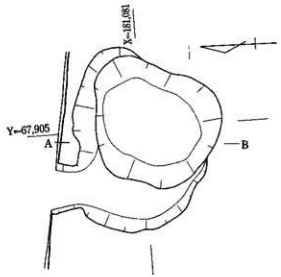
多くの遺物や礫が出土した。土坑のほぼ全体より出土するが、中央から北半にかけて集中している。礫は30個程確認され、径0.1から0.2mの円礫が多いが、中には片岩も含まれていた。被熱により赤変しているものが多い。遺物はこれらの礫に混在する。出土状況からは何らかの意図を持って配置されたものとは考えにくい。北辺から中央にかけて集中していることから、北側から投棄されたものと考えられる。

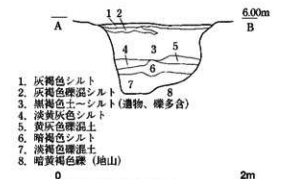


第24図　地鎮遺構2出土遺物

遺物には土師器坏（89、90）、瓦器椀（87）、土師質土釜（91、92）、土師質真蛸壺（93～96、99）、土錘（103～105）がある。89、90は共に断面方形の高い高台を持つ。87は断面が低い三角形の高台を有する。残りが悪く調整は不明である。91、92は土師質土釜である。91は頸部に幅の狭い鍔を巡らし、短い口縁部が内湾しつつ立上がる。摂津F型か。94は体部から口縁部までが直線的に続くもので、体部と

頸部の境に強いヨコナデを施す。内部には粘土紐の痕跡を明瞭に残す。96は頸部を強くユビオサエし、肩のはったプロポーションをとる。土錘は棒状のもので、両端に穿孔を有する。104は全体に面取りが施されている。出土遺物より、おおよそ13世紀前半に位置づけることができる。





第25図　井戸平面図及び断面図

3．土坑３（第29・30図、ＰＬ．11・21）

Ｂ４区中央部において確認された。土坑２の南2.3mに位置する。一辺1.0～1.4m、深さ0.2mを測るいびつな方形を呈する土坑である。土坑２と同様におおよそ北に軸を向ける。断面形状は逆台形を呈し、底部は平坦である。埋土の状況は基本的に土坑２と共通するものであるが、上部が幾分耕作に伴い乱されている。

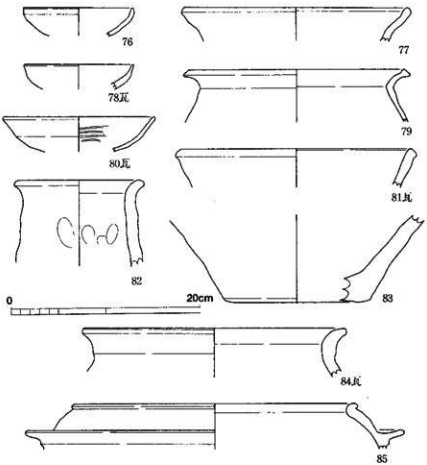
多くの遺物、礫が出土した。中央より北側に集中している。また土坑東半には長径0.1～0.2mの粘土塊が含まれていた。礫は径0.2～0.3mと土坑２に比べて幾分大きなものが含まれるが、被熱したものは確認されなかった。遺物は礫に混在して認められ、山茶碗（88）や土師質真蛸壺（97、98）、土錘（100～102）などが出土した。88は断面三角形の高台を有し、緩やかに内湾しつつ立上がる体部から外反する口縁部を持つ。底部には糸切りの痕跡が残る。見込みには重ね焼きの痕跡が認められる。灰褐色を呈し、胎土は精緻で、わずかに白色砂粒を含む。尾張型５か。98は体部と頸部の境が明瞭でなく、ヨコナデによるわずかな窪みを経て、大きく外反する口縁部へと続く。100、101は大型の管状土錘であり、長軸方向に径1.5cm程の孔が貫通する。竹などに粘土を巻き付けて整形したものであろう。102は棒状土錘であり、両端の穿孔の周囲をヘラケズリする。

山茶碗の年代観により、13世紀前半に属するものと考えられる。

4．土坑４（第31・32図、ＰＬ．11・12・21）

Ｂ２区中央部において確認された。遺構西端は調査区外へと伸びる。径3.4、2.1、2.0mを測る土坑が互いに切り合う。平面的には中央の土坑を南北の土坑が切っている。それぞれの土坑はいびつな楕円形、もしくは方形に近い形状を呈し、深さは0.1～0.3mを測る。断面形状はいずれも浅い皿状を呈する。埋土の堆積状況からは３基の土坑は一様に埋没した様子が伺え、それぞれに時間差は認められなかった。こうしたことから、これらの土坑はほぼ同時期に掘削されたものと判断される。

多くの遺物、礫が出土したが、特に中央と南側の土坑に集中し、北側の土坑では出土状況にまとまりは認められなかった。中央の土坑には長径0.3～0.9mを測る粘土塊が認められる。粘土塊に被覆されるように瓦器椀などが出土している。南側の土坑には多くの礫があり、その大半が被熱していた。出土状況に何らかの意図的なものを見出すことは困難であり、廃棄土坑であるとも考えられるが、多くの粘土塊の存在から、粘土置き場的なものであった可能性もある。

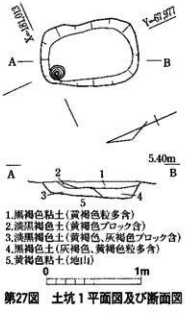


第26図　井戸出土遺物

遺物には土師器（106、109、110、113、114）瓦器（107、108、111、112、115、116）、灰釉陶器（117）、土師質土釜（118、120、121）、土師質鍋壺（122～124）、瓦（125）、滑石製品（119）がある。106、110は土師器坏である。106は口縁下部にヨコナデによる緩やかな稜線を有する。109、113、114は小皿である。底部から直線的に立上がるもの（109、114）と、緩やかに立上がるもの（113）がある。107、108、111、112、115は瓦器椀である。いずれも断面三角形の低い高台を有する。107や112の内面には圏線状のヘラミガキが加えられ、107の見込みには連結輪状のヘラミガキが認められる。116は瓦器小皿である。体部内面に圏線状のヘラミガキが加えられる。117は灰釉陶器底部である。平底を呈する。土師質土釜はいずれも紀伊型に属し、鍔部は短く、断面三角形を呈し、口縁端部は内側に折りまげられ、強いナデによって平坦面をなす。土師質鍋壺には釣鐘型をていするもの（123）と、砲弾型を呈するものがあり、122の体部には2条のヘラ記号が認められる。125は平瓦である。摩滅により詳細は不明である。119は滑石製石鍋を転用した温石と考えられる。全体に2次加工が認められ、本来の加工痕との区別は困難である。内面には大きく擦痕があり、レンズ状に窪んでいる。断面形状に石鍋の痕跡を残すが、本来あった鍔部は削り取られている。短辺に沿って穿孔を意識したものか、鋭利な工具で突いた跡が集中して認められる。孔としては貫通していないため、未製品なのかもしれない。13世紀前半のものか。これら出土遺物により、13世紀末から14世紀に位置づけることができる。

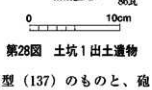
5．土坑5（第33・34図、ＰＬ．12・21）

Ｂ２区南部において確認された。遺構の西端は調査区外へと伸びる。長径2.2m、深さ0.2～0.35mを測り、平面的には方形に近い形状を呈する。軸はＥ－9°－Ｎに向ける。掘方は２段になり、遺構南側の２／３程を占める隅丸台形を呈する範囲が一段低い。断面形状は船底状を呈し、底部は平坦である。埋土の状況からは北から南へ順次埋まっていった様子が窺える。埋土より多くの遺物が出土し、また南側の土坑底部に接した状態で瓦器椀や瓦片、鉄釘、礫が出土している。底部の出土状況は北辺を意識したかのような状態を示すが、２次移動の可能性もあり、定かではない。また鉄釘が出土していることから木製容器の存在も窺えるが、単独であり、何に伴うものかは不明である。



第27図　土坑１平面図及び断面図

出土遺物には瓦器椀（126、127、129～134）、土師器小皿（128）、瓦質土器甕（138）、土師質蛸壺（135～137）、平瓦（139、140）がある。瓦器椀は断面三角形の低い高台を有するもので、体部内面に圏線状のヘラミガキを加えるものが多い。126の見込みには斜格子状の、129には連結輪状のミガキが認められる。138は類部から大きく外反する口縁部を持つ。体部から口縁部まで連続するタタキが認められ、形成以前に施されたものであることがわかる。土師質蛸壺には釣鐘型（137）のものと、砲弾型を呈するものがある。平瓦139は凹面に糸切り痕が、凸面にはハナレズナが認められる。側縁は面取りがなされるが、端部は凹面側に折りまげられる。140の凹面には模骨痕が認められる。これらの出土遺物には時期的にさかのぼるものもあるものの、概して13世紀末から14世紀に属するものと位置づけられる。



第28図　土坑１出土遺物

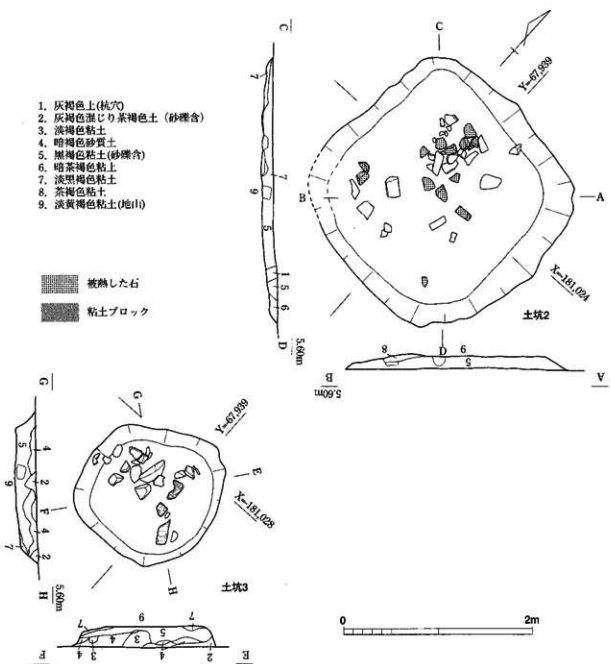
6．土坑6（第35・36図、ＰＬ．12・22）

Ｂ２区南端部において確認された。後述する土坑７と隣接する。長径2.0m、短径1.2m、深さ0.3mを測る長方形を呈する。軸はＥ－11°－Ｎへ向ける。断面形状は底部中央が幾分盛り上がった逆台形を呈する。埋土は２層に分けることができ、上層の黒褐色粘質シルトには焼土や炭を含む。底部より幾分浮いた状態で、遺物や礫が出土した。礫は長径0.1～0.3mを測るもので、半分近くのものが被熱し、赤変していた。遺物は礫の間に混在する。遺物には瓦器椀（141～145）、土師器（146～149）、磁器（150～151）、須恵器甕（152）、土師質土釜（156）、鉢（155）、土錘（153、154）、瓦（158～161）があり、他に片岩片も出土している。

瓦器椀のうち、143と145には断面三角形の低い高台が付き、141、142、145の体部内面や見込みにはヘラミガキが認められる。146は土師器坏であり、147～149は皿である。皿には口径10cmを超えるものと、10cm以下のものがある。前者は底部と体部の境にヨコナデによる緩やかな稜線が認められる。150は青磁椀または皿である。灰白色の精緻な胎土を持ち、全面に暗緑色の施釉

がなされた後、削りだし高台の畳付のみ掻き取られる。151は白磁椀または皿である。灰白色の精緻な胎土である。見込みの釉色は乳白色を呈する。高台は削り出しであり外面を直に、内面を斜めに削る。152は口縁端部を外方向に摘み出し、上部を窄ませる。体部から連続するタタキが認められる。東播系の製品である。156は紀伊型土釜である。155は口縁外面直下に鍔の付いていた痕跡が認められる。外面に多くの煤が付着する。153、154は大型の管状土錘であるが、153には十字状のヘラ記号が認められる。平瓦のうち、158は、凹面布目、凸面縄タタキ、159は凹面糸切り痕とハナレズナ、凸面には糸切り痕と縄タタキの痕跡が認められる。

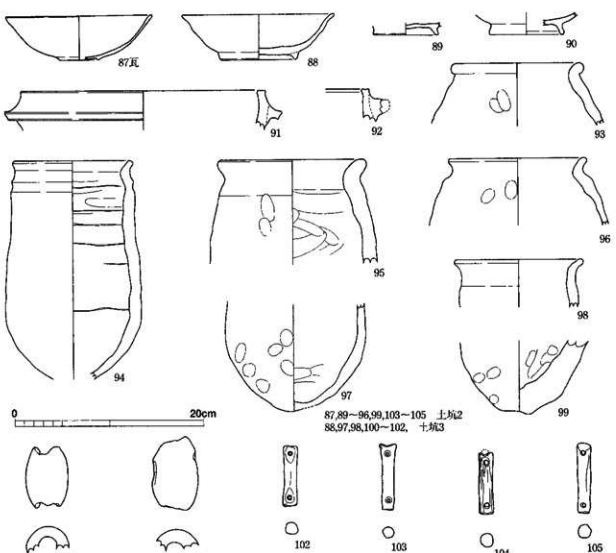
出土遺物には若干の時期幅が窺えるが、概して13世紀後半から末に位置づけられる。



第29図　土坑2、 3平面図及び断面図

7．土坑７（第35・36図、ＰＬ．13・22）

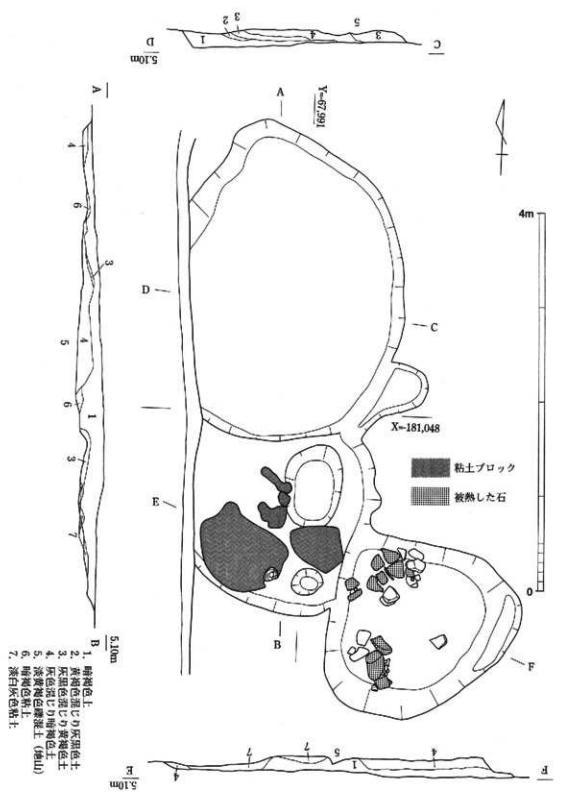
Ｂ２区南端において確認された。土坑６の南に位置し、その距離は心々間で2.3ｍを測る。長径2.0ｍ、短径1.1ｍ、深さ0.25ｍを測るいびつな長方形を呈し、土坑の北東隅と西隅が一部拡張される。軸はＥ−20°−Ｎへ向け、土坑６よりも幾分北に振る。断面形状は逆台形を呈するが、底部に起伏が認められる。埋土は１層であり、黄褐色粒を多量に含んだ淡暗褐色土である。底部より幾分浮た状態で、多くの礫が認められた。礫は径0.1〜0.2ｍを測る自然石であり、土坑６のものと比べて少し小さい。また被熱したものも見受けられなかった。遺物は礫の間からわずかに出土した。157は紀伊型土釜である。頸部から大きく屈曲し直線的に伸びる口縁部を持ち、端部を上方に折りまげる。肩部には鍔を巡らせている。遺物の年代観に拠れば、土坑７については、12世紀末から13世紀前半のものとなるが、遺構の状況は土坑６とほぼ共通しており、出土遺物の時期差をそのまま遺構の年代差として捉えてよいものかどうかは、不明である。



第30図　土坑２、３出土遺物

8．土坑８（第37・38図、ＰＬ．13・22）

Ｂ４区南端部において確認された。長径4.0m、短径1.1m、深さ0.1mを測るいびつな長方形を呈する土坑である。長軸をW−15°−Nに向ける。掘立柱建物５の項でも述べたように、掘立柱

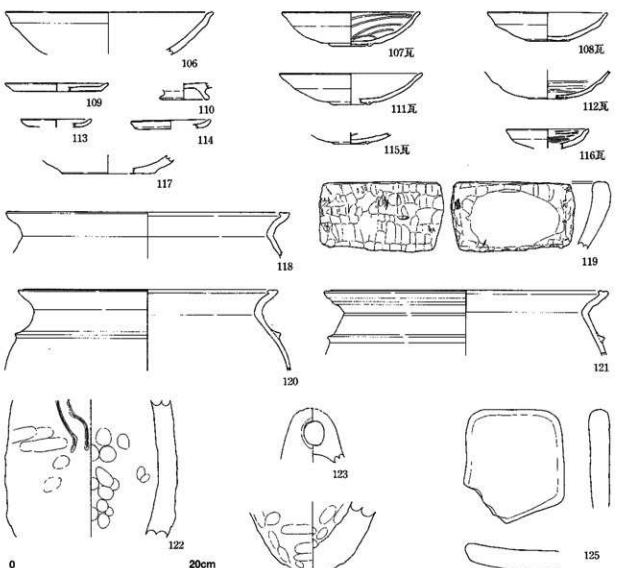


第31図　土坑４平面図及び断面図

建物５の北端桁行の中に納まる。断面形状は船底状を呈し、底部は若干の起伏があるものの、概ね平坦である。埋土は２層に分けることができるが、基本的には暗褐色土である。焼土や炭を多く含む。底部の東西両端に径0.15～0.35を測るピットが３基確認された。径0.1mの柱痕跡を伴うものもある。埋土の状況からは、これらのピットが土坑に伴うものか、それ以前のものかは不明である。

多くの遺物、礫が出土した。いずれもまとまりをもたず、遺構全体から出土する。礫は長径0.10～0.25mを測るもので、ほとんどが砂岩であったが、緑色片岩も含まれている。また被熱し赤変するものがある。

遺物には瓦器椀（162、165、168）、土師器椀（163、166）、皿（169、170）、甕（164）、土師質土釜（167、173）、土師質真蜻蛉（171、172、175～177）、土錘（174）がある。162、168は断面三角形の高台を有し、168の見込みには斜格子状のヘラミガキが認められる。166の見込みには平



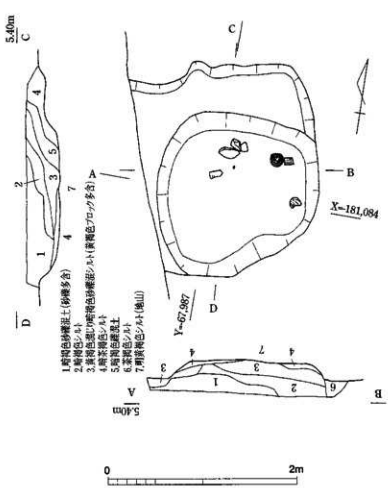
第32図　土坑４出土遺物

行線状のヘラミガキが認められる。164は頸部から体部外面に縦方向の、口縁部内面には横方向のハケ目が認められる。167、173は紀伊型土釜であり、いずれも頸部より外方向へ強く屈曲する口縁部を持ち、端部は上方に摘み上げる。肩部には鍔を巡らす。土師質真蛸壺のうち、171、172は頸部より垂直気味に立上がる口縁部を持つ。175は頸部を強く指圧し、段を有する。174は大型管状土錘である。これら遺物のうち164は平安時代の所産と考えられ、167は12世紀末頃の特徴を有し、時代的に古いものもあるが、総じて13世紀前半頃に位置づけられようか。こうして得られた年代観は、掘立柱建物5の出土遺物と大きな差はなく、互いに共存した可能性も考えられる。ただし、次章において検討しているように、掘立柱建物5については時期的に若干下る可能性もあり、さらに総柱建物とした掘立柱建物5の東柱の間に位置する土坑8がどのように機能したのかを含めて、現段階では不明である。

9．土坑9【土坑墓か】（第39・40図、ＰＬ．13・22）

Ｃ5区中央部北よりにおいて確認された。径1.0ｍを測る不整円形の東辺中央部に径0.4ｍの円形が付随する形状を持つ。深さは0.4～0.5ｍで、拡張部の方が浅い。断面形状は椀状である。平面的に確認することができず、一連の遺構として捉えたが、西側と東側では異なる遺構であった可能性もある。土坑中央部、底部より0.3ｍ程上位において灰釉瓶がほぼ横倒しになった状態で確認された。また灰釉瓶の下に土師器皿がまとまって見つかっている。こうした出土状態により、灰釉瓶が蔵骨器に転用された可能性を考え、内部の土壌をすべて水洗したが、何も含まれていなかった。

埋土より上記のほか、瓦器椀などが多く出土している。図示することができたのは、灰釉瓶（206）のほか、土師器（178～180、182～184、186、187、190、191、195、198、199、201）、瓦器椀（181、185、189、192～194、196、197、200、203～205）である。土師器小皿は底部より緩やかに立上がるものが多く、180、184には細く高い高台が付く。183は坏である。緩やかに内湾しつつ立上がる体部に短く

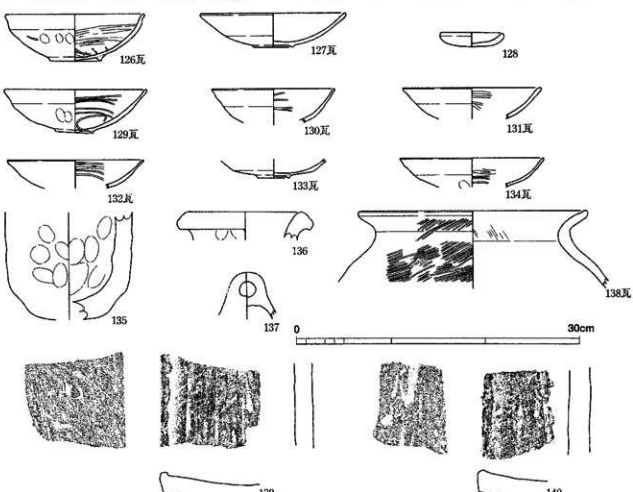


第33図　土坑５平面図及び断面図

外反する口縁部を有する。瓦器椀は残りが悪く、完形に復原できるものが余り無い。192は断面三角形の高台を有し、体部内面には圏線状、見込みには連結輪状のヘラミガキが施される。196は体部の立上がりがきつく、器高が高い。206は断面台形の高台を有し、体部全体を回転ナデによって仕上げる。頸部には明瞭な段を有する。頸部よりやや外反しつつ垂直気味に立上がる口縁部を持つ。肩部に把手を付けるが、上部は欠損する。口縁部より頸部、肩部にかけてオリーブ色の自然釉がかかる。古瀬戸前期に属するものか。これら出土遺物により土坑9は、13世紀前半に位置づけることができる。

10. 土坑10【土坑墓】（第39・41図、PL. 13・14・22）

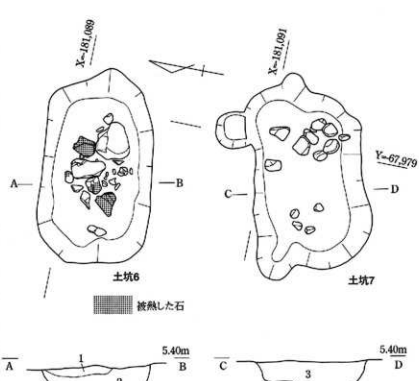
C5区中央部北よりにおいて確認された。土坑9の南約1.0mに位置する。長径1.8m、短径0.8～1.1m、深さ0.15mを測る楕円形に近い形状を呈するものと考えられるが、北端を別の遺構に切られており、本来の形状は不明である。長軸をN-14°-Eに向ける。土坑中央から南半部において遺物、礫が出土した。いずれも底部にほぼ接している。土坑中央部、やや西よりにおいて、和鏡が鏡面を上に向け、ほぼ水平な状態で出土した。一部を欠損するがほぼ完全な形を保っていた。鏡背には板状の木製品が密着していた。和鏡から南には瓦器椀、さらに南に土師器小皿



第34図　土坑5出土遺物

がかたまって出土している。また土器群の東及び土坑の南端には長径0.15～0.25mの礫が認められた。出土状況から、それぞれの遺物が原位置にあるかどうかの確証を得ることはできなかった。

和鏡（215）は直径9.5cm、鏡胎厚0.15cm、周縁幅0.3cm、高さ0.4cmを測る。周縁はやや外傾する。幅0.1cmの細い圏線によって外区と内区を分ける。花形座鈕である。外区には洲浜を表し、内区は菊花とみえる植物が表現されるが、鋳出しが不良であり、かつ摩滅や発錆が進んでいるため、文様構成の把握は困難である。鏡面は平滑に研磨されている。鏡胎の薄さ、周縁の形態より12世紀末から13世紀前半に位置づけられる。



第35図　土坑6、7平面図及び断面図

木製品（214）は一辺が6.0cm、厚さ0.1cmの隅丸方形の板である。木目と直交する位置に片側2ヵ所ずつの孔をあけ、そこに、恐らくは竹簀で作った紐を渡し、反対側で結束する。図化できなかったが輪状に曲げられた竹簀も出土しており、また板本体にも輪状の圧痕が残ることから、紐によって竹簀で作った直径5.5cm程度の輪を、板本体に固定していたものと考えられる。輪の高さは不明であり、どのような形態になるのかは分からない。また板の結び目のある方には、和鏡の鈕の圧痕が残っており、輪状の部分は鏡からみると下に位置する。この木製品は和鏡を納める容器としては小さく、どのような目的を持って鏡と共伴したのかは不明である。

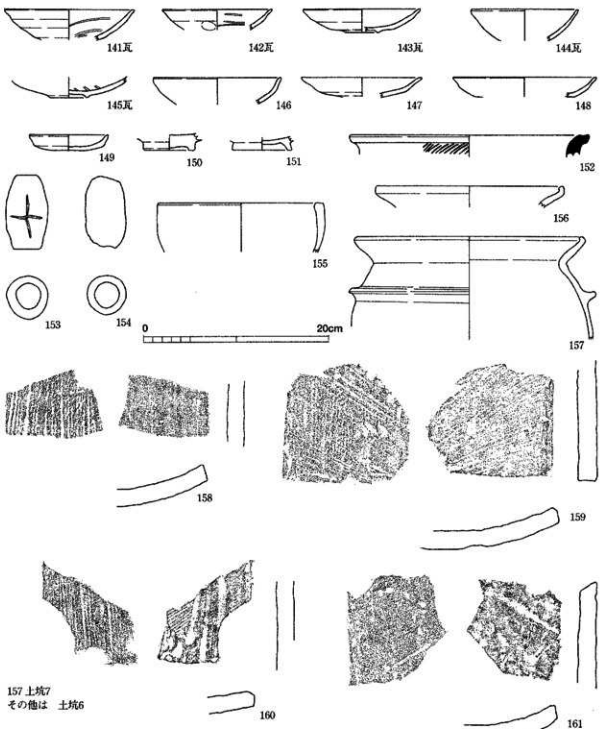
瓦器椀（213）は、低くわずかな起伏として認識される高台を持つ。内面にわずかにヘラミガキが認められる。土師器小皿（207～211）には底部から緩やかに立上がるもの（207、208、210）と、底部との境界にヨコナデによる稜線を持つものがある。瓦器椀の年代観により、土坑10は13世紀前半に位置づけることができ、和鏡については伝世したものが埋納されたものと理解したい。

11．土坑11【火葬墓】（第39・41図、PL．14・22）

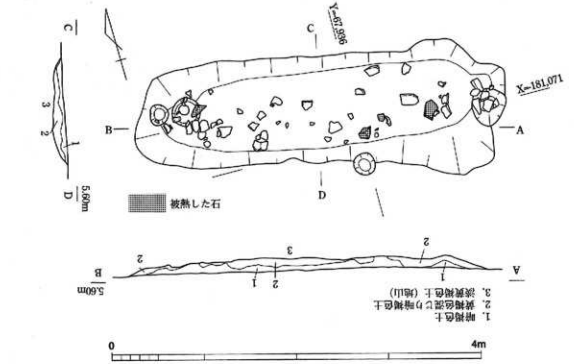
C5区中央部、東端において確認された。長辺2.1mを測る長方形を呈するものと考えられるが、東端は調査区外へと伸びており、幅については0.3mを確認したにとどまる。深さは0.3m

で、埋土は黒褐色粘質土が大半を占めるが、遺構南半の底部に暗灰色シルトと暗灰色砂が堆積している。このうち暗灰色シルトには焼土及び微細な骨片が多量に含まれており、遺構は火葬墓と考えるに至った。

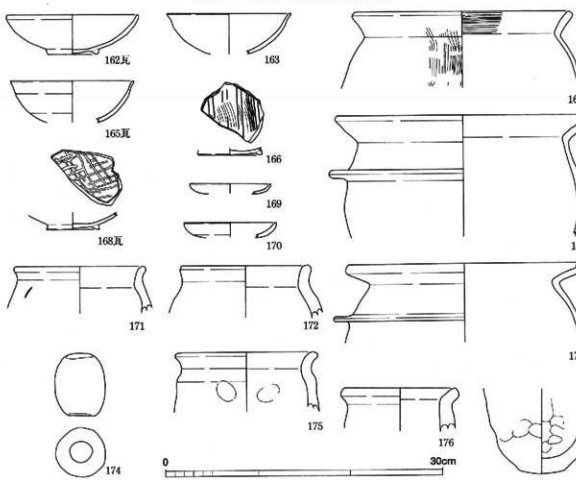
遺物はほとんど出土しておらず、図示できたものは土師器皿（212）のみである。212は平底であり、ヨコナデによって口縁は外反する。



第36図　土坑６、７出土遺物



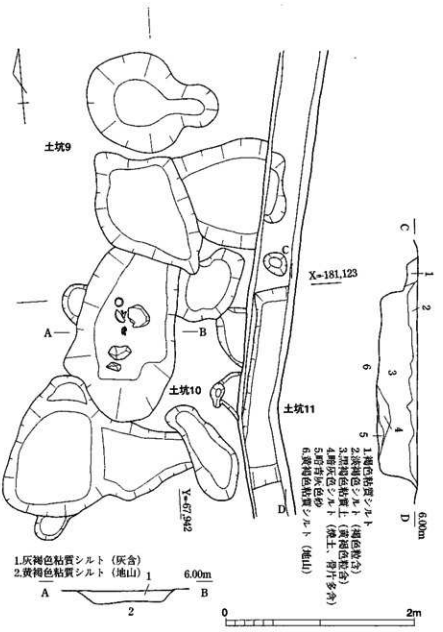
第37図　土坑 8 平面図及び断面図



第38図　土坑 8 出土遺物

12. 土坑12【火葬施設】（第42・44図、PL.14・22）

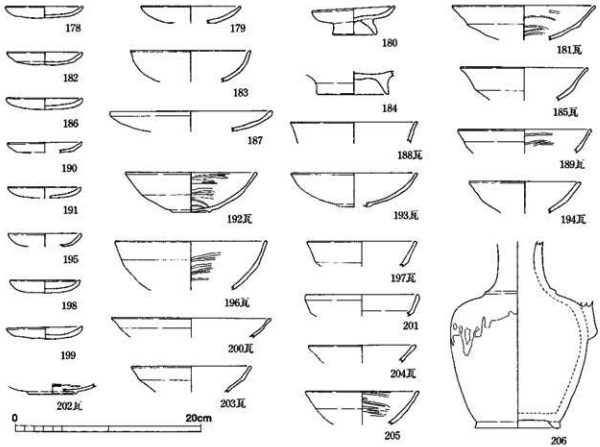
C5区とC4区の交点で確認された。長軸をN－15°－Eに向けた長辺2.0m、短辺1.1m、深さ0.1mの長方形を呈する土坑を基本とし、土坑中央に長さ2.6m、幅0.2m、土坑底部よりの深さ0.1mの溝を設けたものである。溝は土坑長軸に平行し、溝の両端はそれぞれ、0.2～0.3mにわたって土坑より外へ突出する。溝の上端から側壁にかけてが被熱によって赤変しており、土坑底部及び溝の埋土には多量の炭や焼土が含まれていた。遺物はほとんど出土していない。図示することのできた遺物には土師器皿（216）、瓦器椀（218）、須恵器鉢（223）がある。216は口縁部と体部にヨコナデによる稜線が2条巡る。218は底部より内湾しつつ立上がる体部に外傾する口縁部を持つ。体部内面にわずかにヘラミガキが認められる。228は口縁端部が上方に拡張される。



第39図　土坑9、10、11平面図及び断面図

遺物の状況によって13世紀前半の年代が与えられるが、上述のようにこれらが、遺構に直接結びつくかどうかは断定できない。

土坑12と同様の形態を持つ類例としては、奈良県宇陀地方に比較的多く分布し、また泉州地域では和泉市万町遺跡において15世紀代のものが知られている。これらは火葬施設として位置づけられており、土坑12についても同様の施設と考えられる。被熱した溝や埋土に含まれる炭や焼土は、遺骸を荼毘に付した際に生じたものと捉えることができる。遺構からは骨は全く出土しな

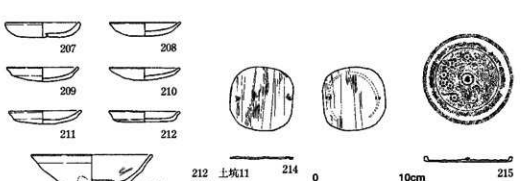


第40図　土坑９出土遺物

かったが、火葬後の丁寧な収骨によるものであると考えられる。

13．土坑13（第43・44図、ＰＬ．15・22）

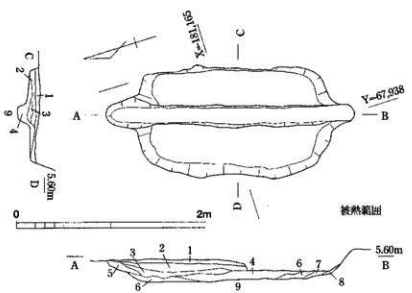
Ｃ４区西端部、調査区北端において確認された。長軸をほぼ東西に沿わせる長辺3.8m、短辺0.8～1.1m以上を測るいびつな長方形を呈するものと考えられるが、北端については調査区外へと伸び、さらに西端を別の遺構と切り合うため、全容は明らかでない。西から東へ階段状に深くなっており、深さは0.2、0.3、0.4～0.5mをそれぞれ測る。最も深い東端部分の範囲は長径2.3m、短径0.7m以上の楕円形を呈し、西端付近が最も深く、東にむかって徐々に浅くなっている。また西から



第41図　土坑10、11出土遺物

2段目の掘壁部及び底部に径0.4～0.8mを測るピットが確認された。最深部の埋土上部より多くの遺物及び礫が出土した。礫は長径0.3mのものを最大とし、全体にまんべんなくあるが、被熱したものは見られなかった。

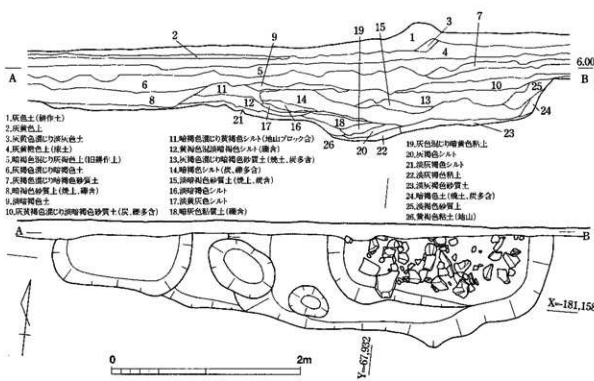
遺物には紀伊型土釜（217、219、221）、土師質真蛸壺（220）、平瓦（222）がある。217は大きく外反する口縁部を持ち、端部を上方に拡張する。219の類部には縦方向のヘラ状工具による押圧痕が残る。220は口縁端部のみであるが、砲弾型を呈するものであろう。222は凹凸両面に糸切り痕及びハナレズナが認められる。



1. 暗褐色砂質土
2. 灰褐色混じり淡褐色土（黄褐色粒多含）
3. 淡褐色シルト（焼土、炭多含）
4. 暗褐色炭混シルト（炭層、焼土含）
5. 灰褐色混淡褐色砂質土（炭多含）
6. 淡褐色炭混シルト（炭層）
7. 淡褐色砂質土（焼土多含、焼遺崩落土）
8. 暗褐色シルト
9. 黄褐色粘土（地山）

第42図　土坑12平面図及び断面図

第6節　焼成土坑



第43図　土坑13平面図及び断面図

1．焼成土坑1（第45・50図、PL．15）

A2区において確認された。径1.8～2.0m、深さ0.15～0.2mを測るいびつな円形を呈する。断面形状は逆台形を呈する。埋土は基本的に1層である。

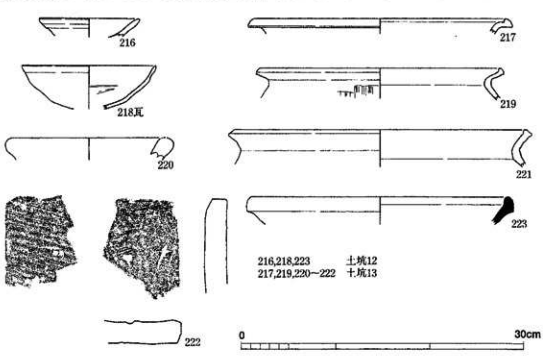
底部の中央から東端部を除く、ほとんどの範囲において被熱の痕跡が見られた。底部の断割り調査を行なった結果、地山が直接被熱していることが確認され、貼り粘土などは確認されなかった。遺物はほとんど出土せず、図示できたものは土錘1点のみである。248は棒状土錘であり、両端に穿孔が認められ、孔の周りを面取りする。

2．焼成土坑2（第46・47・50図、PL．15・23）

B1区中央部において確認された。遺構北端が調査区外へと伸びていたため、調査区を一部拡張し、その全容を把握した。長径4.3m、短径3.3m、深さ0.1～0.15mを測る不整円形を呈する。北端部に浅い平坦面をなす。基本的に地山を底面とするが、遺構の北東から南西にかけては、溝1の埋土上に築かれている。底部中央には径2.0mの被熱範囲が認められる。土坑のほぼ全域より多量の遺物が出土した。

遺物は575点、総重量90.4kgが出土し、うち546点、89.96kgが土師質真蛸壺であった。他には土器27点、0.14kg、土錘2点、0.3kgがわずかに含まれるのみである。

蛸壺はすべてが破砕された状態で出土している。可能な限り接合を試みたが、完形に復元される個体はほとんど無かった。よって出土蛸壺の総量を焼成土坑2（2.2kg）、焼成土坑4（2.0kg）、採掘土坑1（3.3kg）より出土した完形に近い個体の平均重量（2.5kg）によって割ると35.984（個体）という値が得られる。また50点についてヘラ記号が認められ、①三角形の中央に1本の垂線を加えたもの（224～229）と、②漢字「大」を逆にしたもの（280、281）の2種類がある。②は、倒立したまま乾燥段階にある製品に施されたものと考えられ、まさしく「大」と記入したものであろう。①は27点、②は2点、残りは判別できなかった。

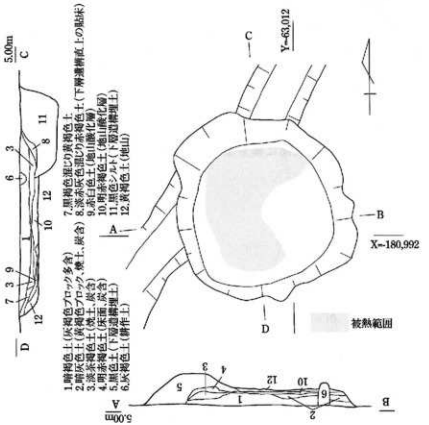


第44図　土坑12、13出土遺物

形状的に

は、ユビオサエにより頸部に明瞭な段を有するもの（232、236）、頸部に稜線を有するが口縁部がほとんど屈曲せず、直線的に立ち上がるもの（238）、稜線を持たず、口縁部の開きも小さいもの（230）などがあるが、緩やかに内湾しつつ立ち上がる体部に、小さく外反する口縁部を有するものが最も多い。229の体部には穿孔が認められる。

242は6世紀代の須恵器坏である。247は小型の管状土錘である。



第45図　焼成土坑1平面図及び断面図

3．焼成土坑3

（第48・50図、ＰＬ．16・23）

Ｂ1区中央部において確認された。南端は調査区外へと伸びるが、径3.0m、深さ0.1mを測るいびつな円形を呈するものと考えられる。断面形状はごく浅い皿状を呈する。底部中央に径1.8mにわたって被熱範囲が認められる。北西方向の側壁に添って、破砕された多くの土師質真蛸壺片が出土した。遺物には土師質真蛸壺（240、241、245、246、249、251、252、254～257）のほか、瓦器椀（243）、土師器皿（244）が出土している。蛸壺にはあまり多くのバリエーションは伺えず、肩部にユビオサエによって明瞭な段を有するという形態的特徴があることから、同一人物の手によるものかも知れない。中には体部が大きく横に張り出すもの（240、245、252）もある。240、241、246にはヘラ記号が認められ、240は片仮名の「カ」に近い。243は瓦器椀である。体部の立ち上がりが急で器高が高い。

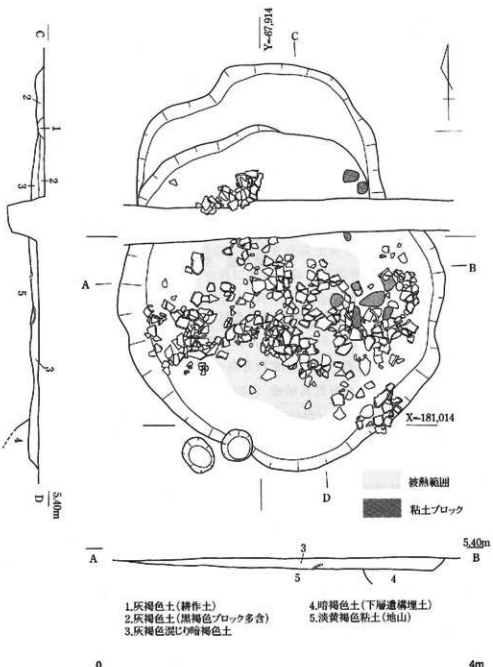
4．焼成土坑4（第49・50図、ＰＬ．16・23）

Ｂ3区中央部において確認された。長径2.1m、短径1.6m、深さ0.05mを測るいびつな楕円形を呈する。上部が削平されており全体に残存状態が悪いが、特に西側の側壁については全く残っていなかった。底部南半に集中して被熱範囲が確認され、北東部側壁には炭の出土もみられる。底部には、ほぼ完全な一個体分となる真蛸壺片が散在していた。

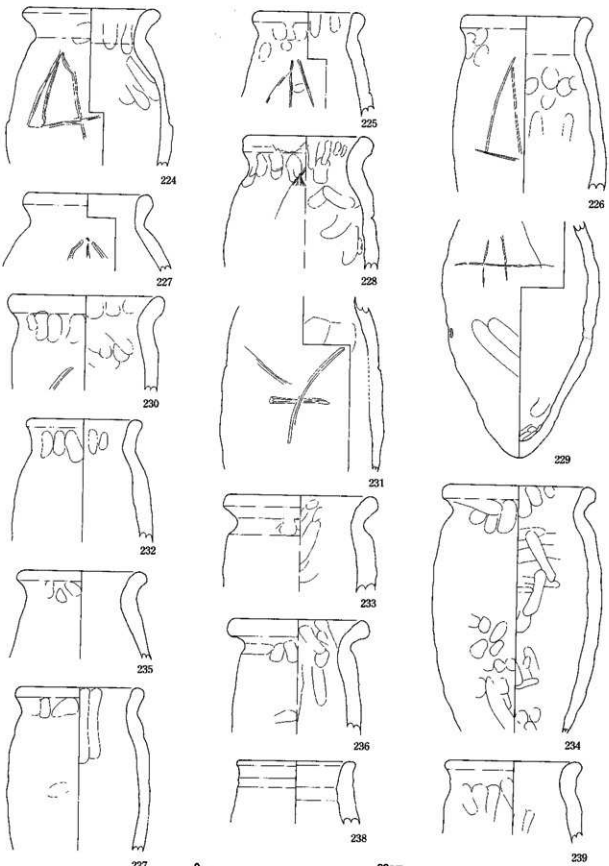
253は、丸底からやや寸胴な体部を経て、小さく外反する口縁部を持つ。全体にナデによる調整である。

5．焼成土坑5（第51・52図、PL．16・23）

C3区中央部、東寄りにおいて確認された。長軸をほぼ北に向ける長辺5.2m、短辺3.2m、深さ0.25mを測るややいびつな長方形を呈し、南辺は径0.8mのピットに接続し、突出する。断面形状は船底状を呈しており、埋土は基本的に1層で、暗褐色シルトである。埋土に多くの焼土、スサ入り粘土塊、礫を含む。スサ入り粘土塊は被熱し硬化している。底部には厚さ0.05mの粘土ブロックがおかれ、いずれも被熱のため赤変している。部分的には還元色を呈し、一部に炭を含む箇所もある。南東部に幾分集中するが、北西及び北東隅にもまとまってみられる。その他、



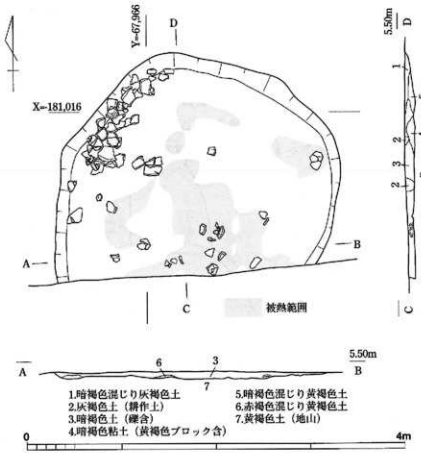
第46図　焼成土坑2平面図及び断面図



第47図　焼成土坑２出土遺物

底部より径0.2～0.6mのピットが確認されたが、径の小さいものに関しては、杭穴などの上層遺構である。南端のピットを含めて径の大きなものの性格は不明である。

遺物は土師質真蛸壺（258～260、262）のほか、土師器皿（264、266）、灰釉瓶（263）、土師質土釜（261）、須恵器鉢（265、267）、瓦質土器鉢（268）などが出土している。真蛸壺には頚部及び口縁部に明瞭なユビオサエ、ナデの痕跡を残す。264は底部から緩やかに体部へと続き、266は直線的に立ち上がる。263は瓶の口縁端部である。端部は外方向に摘み出される。261は口縁部が肥大する。265は口縁端部が上下方向に拡張される。268は上部に1条の突帯が巡る。



第48図　焼成土坑３平面図及び断面図

以上、焼成土坑５については、床面の状況やスサ入り粘土の出土により、何らかの焼成を目的とした土坑であることは間違いないだろう。スサ入り粘土に関しては、窯体そのものである可能性もあるが、民族例などに知られるようなスサと粘土によって対象物を覆う、いわゆる覆い焼きと呼ばれる焼成方法を採った場合でも、焼成後には被覆した粘土が被熱し、窯体の様に見えても不思議ではない。出土遺物の内、15世紀代に属する268を除けば、概ね13世紀代のものと考えることができる。268は混入であろう。

第７節　窯

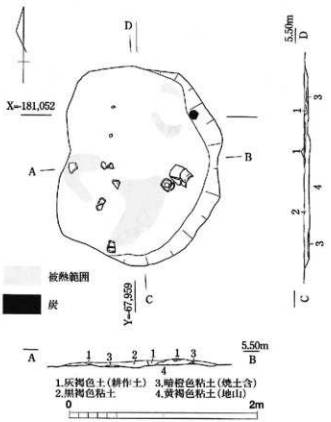
１．窯１（第53・54図、ＰＬ．16・17・23）

Ｃ５区南端部において確認された。土坑中央に平行する２本の台を設けた、有牀式平窯に分類される窯である。焚口から焼成部、奥壁までが残存していた。

窯本体、焼成部をなす土坑は、長軸をほぼ北に向ける長辺2.3m、短辺1.0mの長方形を呈し、

断面形状は船底状を呈し、底部は中央部が幾分窪むものの、おおよそ平坦であり、床面に段などは認められない。

焚口は土坑南東隅に長さ0.4m、幅0.4mの開口部を設けている。焚口南端部は窯2東側の土坑によって切られているため、本来の長さは不明である。また高さについては0.1m程しか確認されなかったが、焚口掘方に沿って被熱による赤変が認められることから、本来の平面形状であると判断される。焚口より焼成部中央に向かって緩やかに床面が傾斜しており、その比高差は0.15mを測る。中央部より緩やかに傾斜を上げ、奥壁へとつながる。床面と焚口及び奥壁の傾斜角はともに10°である。



第49図　焼成土坑4平面図及び断面図

燃焼部の中央、土坑長軸に平行して、長さ1.5m、幅0.2～0.3m、高さ0.25mの2本の牀を地山削り出しによって設けている。牀及び側壁との間隔、すなわち煙道の幅は0.15mである。牀は断面台形を呈する。燃焼部側壁は床面よりほぼ垂直に立上がり、最も残りの良いところで高さ0.25mを測る。焚口と同様に、側壁や牀、掘方上端、奥壁が被熱し赤変しており、焚口から燃焼部に至る床面及び奥壁から手前床面、つまり床の高いところが最も良く赤変している。

窯の上部構造や煙出しについてはほとんど手がかりが無い。埋土に窯体が多く含まれていることから、スサ入り粘土による構築であることが考えられるのみである。

燃焼部埋土には焼土や、窯体が崩落した状態で多く含まれている。煙道床面直上には厚0.02m程の炭層が堆積しており、廃業時の状態を保っているものと考えられる。炭層直上より土師質真蛸壺（272）や土錘（273）が出土した。272は内湾する体部に強く外反する口縁部を持つ。内外面共にユビオサエが認められる。273は大型管状土錘である。芯材に粘土を巻きつけた際の押圧痕が残る。出土時には長軸方向に沿って完全に半裁された状態であった。窯道具として2次利用した可能性も考えられる。

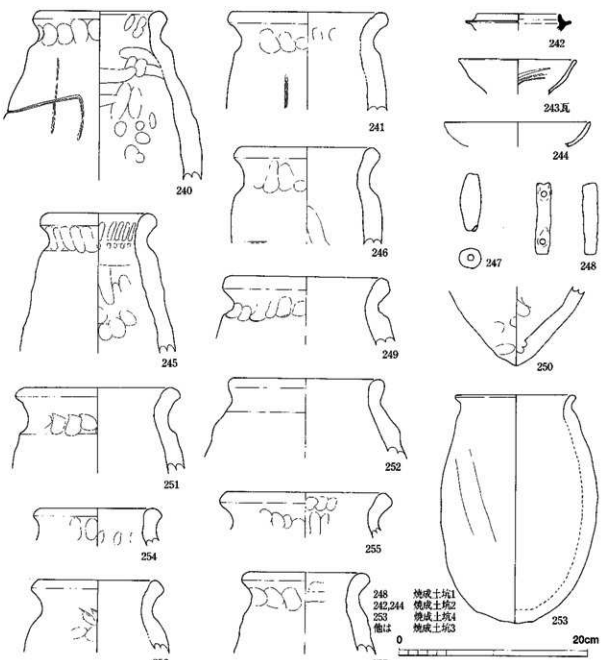
2．窯2（第53・54図、PL．16・17・18・23）

窯1の南0.5mにおいて確認された。窯1と同様の有牀式平窯である。

長辺2.0m、短辺1.1mの土坑を燃焼部となす。土坑長軸はほぼ東西に向いており、窯1軸線と直交する。窯は東西両端を、それぞれ径1.7mを測る土坑によって切られているため、焚口及

び奥壁の状況は不明であるが、窯1の焚口が南に開口することから、窯2については東側が焚口であった可能性が考えられる。こうすることによって同時に火入れする時の作業効率が上がるのである。

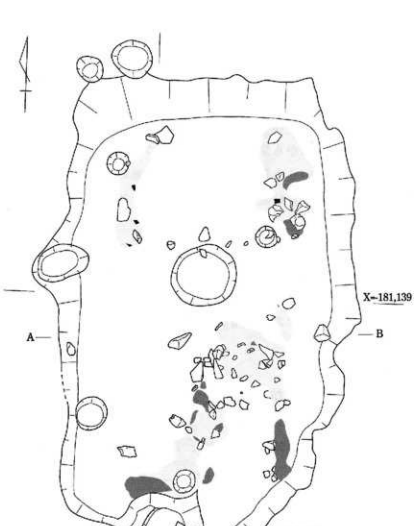
燃焼部土坑の長軸に平行に長さ1.7m、幅0.2～0.25m、高さ0.3mを測る地山削り出しによる牀が設けられる。断面長方形を呈し、窯1と比べて幾分細く、高い。焔道の幅は北から0.2m、0.15m、0.2mをそれぞれ測り、中央が幾分狭い。焔道床面は平坦であり、窯1のような傾斜はみられない。



第50図　焼成土坑1、2、3、4出土遺物

南端の焔道、中央部分において長さ0.1m、厚さ0.05mの淡赤白色粘土が床面直上に貼り付けられていた。粘土両端は側壁と牀側面にも及んでおり、意図的に貼り付けたものと考えて間違いない。また炭層直下にて確認されたことから、粘土を貼り付けた状態で操業したことは確実である。しかしながら窯自体が地山を掘り込んで築造されているので、敢えて補修の必要は無いものと考えられ、貼り粘土がどのような意図によるものかは不明と言わざるを得ない。

燃焼部側壁は床面よりほぼ垂直に立上がり、最も残りの良いところで0.3mを測る。側壁及び上端、牀の側面及び両端に被熱による赤変が認められる。埋土の状況は焔道床面直上に炭層が0.02～0.05m堆積し、炭層直上には焼土や崩落窯体が堆積する。炭層直上より多くの土師質真蛸壺、土師器小皿が出土した。



第51図　焼成土坑５平面図及び断面図

窯の東西を切る土坑からも多くの蛸壺や土師器小皿が出土している。土坑底部には窯から掻き出された状態で炭層が堆積していることから、こうした遺物についても窯から掻き出されたものと考えて良いだろう。

図示した遺物はすべて窯２内部より出土したもので、東西の土坑出土のものは含んでいない。269～284は土師器皿である。口径10㎝未満の小皿が多いが、10㎝を超えるものもある。小皿は平底を呈するものと、底部中央にかけて膨らむものとがある。底部からの立上がりは直線的なものが多いが、270、271は緩やかに内湾する。283は底部中央の窪むへそ皿である。土師質真蛸壺に

は体部内傾が強いものと、傾きが弱く、直線的に立上がるもの（286、287、289、294、296）がある。後者の口縁部は緩やかに外反させるものが多いが、287、294のように頸部が強く張り出し、結果的に口縁部が大きく外反するものもある。285、288の体部にはヘラ記号が認められる。

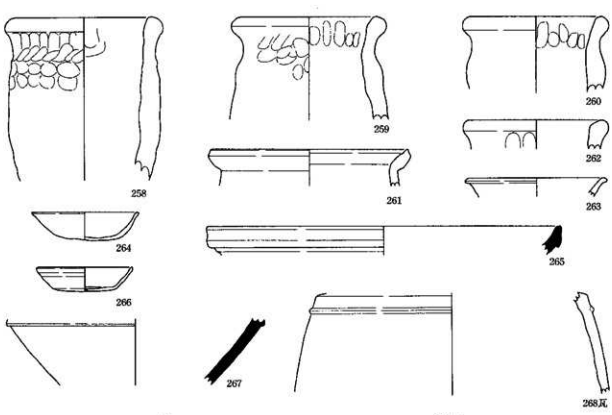
遺物には明確に年代決定できるだけの資料が得られなかったが、京都における土師器小皿の年代観を援用すれば、12世紀中頃～13世紀前半の特徴を持つ。

遺物の出土状況から窯２、また窯１についても、真蛸壺を焼成したものと考えられる。しかしながら真蛸壺という大型でかつ不安定な形態の製品をどの様に窯詰めしたものかを知る手がかりは得られなかった。蛸壺を横倒しにし、枠を渡したものか。その際、製品を安定させるために半裁した土師を用いたのかも知れない。

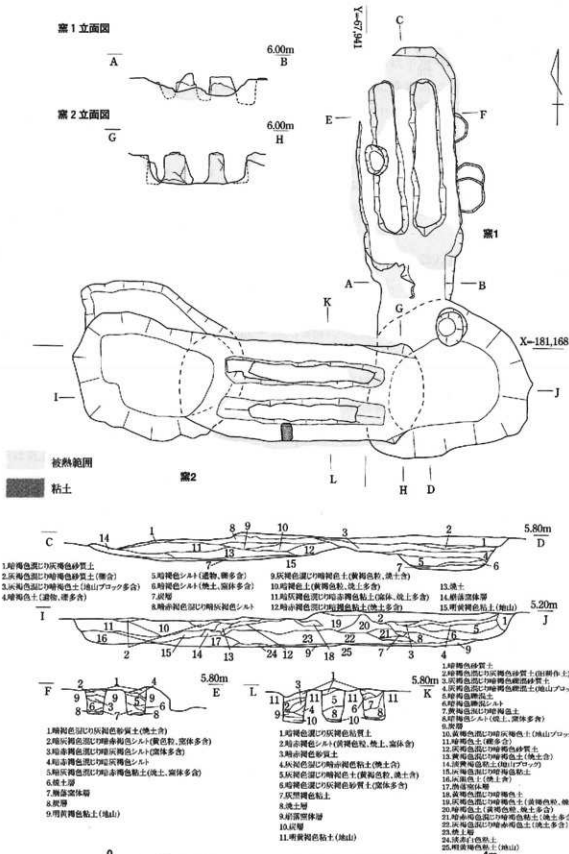
窯２の土師器小皿については、出土状況から蛸壺と同様に焼成された可能性を否定できない。しかしながら酸化炎焼成を必要とする土師器小皿を上記構造の窯で焼くことができたのだろうか。窯体が出土することから、スサ入り粘土によって天井部を構築したと考えたが、窯自体は閉塞されず、覆い焼きをする際に用いられた粘土なのかも知れない。窯の構造については今後、充分な検討を要する。

第８節　採掘土坑

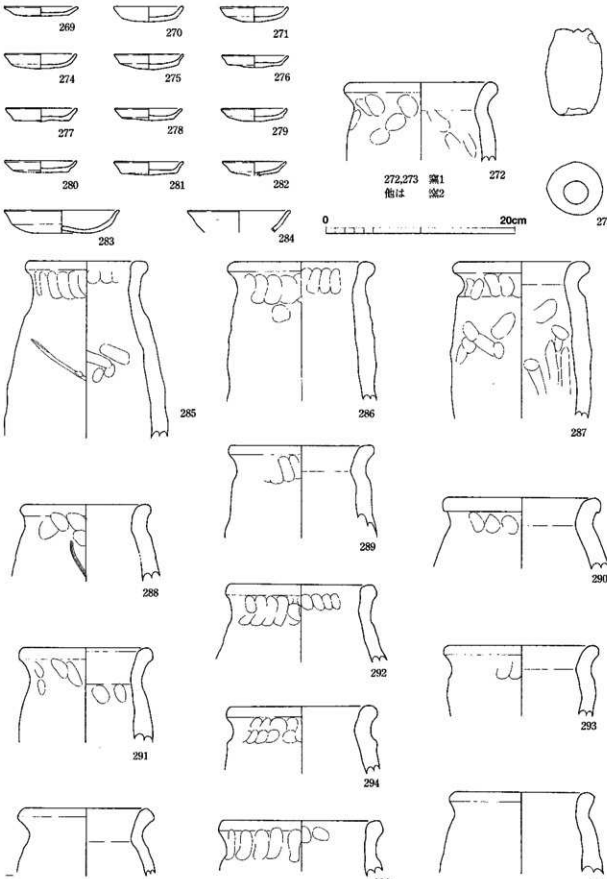
１．採掘土坑１（第55～57図、PL．18・23・24）



第52図　焼成土坑５出土遺物


窯1立面図
窯2立面図
6.00m
Y=67,941
X=181,168
窯1
窯2
被熱範囲
粘土
5.80m
1.暗褐色混じり灰褐色砂質土
2.灰褐色混じり暗褐色砂質土(雑含)
3.灰褐色混じり暗褐色土(地山ブロック多含)
4.暗褐色土(遺物、礫多含)
5.暗褐色シルト(遺物、礫多含)
6.暗褐色シルト(焼土、窯体多含)
7.炭層
8.暗赤褐色混じり暗灰褐色シルト
9.灰褐色混じり暗褐色土(黄褐色粒、焼土含)
10.暗褐色土(黄褐色粒、焼土多含)
11.暗灰褐色混じり暗赤褐色粘土(窯体、焼土多含)
12.暗赤褐色混じり暗褐色粘土(焼土多含)
13.焼土
14.崩落窯体層
15.明黄褐色粘土(地山)
1.暗褐色混じり灰褐色砂質土(焼土含)
2.暗灰褐色混じり暗赤褐色シルト(黄色粒、窯体多含)
3.暗赤褐色混じり暗灰褐色シルト(窯体多含)
4.暗赤褐色混じり暗灰褐色シルト
5.暗灰褐色混じり暗赤褐色粘土(焼土、窯体多含)
6.焼土層
7.崩落窯体層
8.炭層
9.明黄褐色粘土(地山)
1.暗褐色混じり灰褐色粘質土
2.暗赤褐色シルト(黄褐色粒、焼土、窯体含)
3.暗赤褐色砂質土
4.灰褐色混じり暗赤褐色粘土(焼土含)
5.灰褐色混じり暗褐色土(黄褐色粒、焼土含)
6.暗褐色混じり灰褐色砂質土(窯体多含)
7.灰黒褐色粘土
8.焼土層
9.崩落窯体層
10.炭層
11.明黄褐色粘土(地山)
1.暗褐色砂質土
2.暗褐色混じり灰褐色砂質土(谷間作土)
3.灰褐色混じり暗褐色礫混砂質土
4.灰褐色混じり暗褐色礫混土(地山ブロック多含)
5.暗褐色礫混土
6.暗褐色礫混シルト
7.黄褐色混じり暗褐色土
8.暗褐色シルト(焼土、窯体多含)
9.炭層
10.黄褐色混じり暗灰褐色土(地山ブロック多含)
11.暗褐色土(礫多含)
12.灰褐色混じり暗褐色砂質土
13.黄褐色混じり暗褐色土(焼土含)
14.淡黄褐色粘土(地山ブロック)
15.灰褐色混じり暗褐色粘土
16.灰黒色土(焼土含)
17.焼落窯体層
18.黄褐色混じり暗褐色土
19.灰褐色混じり暗褐色土(黄褐色粒、焼土含)
20.暗褐色土(黄褐色粒、焼土多含)
21.暗赤褐色混じり暗褐色粘土(焼土多含)
22.灰褐色混じり暗赤褐色土(焼土多含)
23.焼土層
24.淡赤白色粘土
25.明黄褐色粘土(地山)
0
4m

第53図　窯1、2



第54図　窯１、２出土遺物

C５区中央部南寄りにおいて確認された。互いに切り合う不整形の土坑群である。東西ともに調査区外へと伸びる。土坑は長径1.8～2.7m、深さ0.2～0.3mを測り、南西端のものが最も規模が大きい。断面形状は浅い皿状もしくは逆台形を呈し、底部は平坦である。平面的には東から西へと土坑が切り合うが、断面観察によるとそれぞれの埋没に時間差は伺えず、北から南へと順次土を押し入れていった様子が分かる。これらの状況から、土坑群は相次いで掘削され、また同時に埋め戻されたものと捉えることができ、地山の粘土を採掘するための土坑と考えることができるのである。

土坑群に挟まれた地点において、被熱による焼土面が確認された。長さ2.0m、幅0.6～1.0mの範囲が被熱している。掘方は採掘土坑により全て失われているが、焼成土坑であった可能性がある。

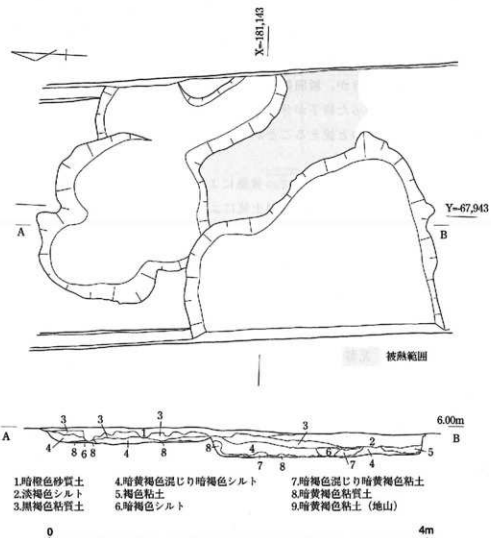
採掘土坑の埋土から多くの遺物が出土した。土師器小皿（298、299、302、303、304、308）、瓦器椀（300、301、306、307、310、311、315、316、318、319、321、322）、瓦器小皿（305）、白磁（309、313、314）、青磁（317）、土師質土釜（324、328）、土師質三足（325）、瓦質土器浅鉢（326）、土師質真蛸壺（335、336、340～342、344）、土錘（337～339）、瓦（347～350）、漆製品（312）である。瓦器椀は断面方形の高台を持つものが多いが、断面三角形のもの（319、321）、断面が半円形に近いもの（301）がある。体部内面に圏線状のヘラミガキを加えるものが多く、319の見込みには連結輪状のヘラミガキが認められる。309は椀もしくは皿の底部である。黄白色の精緻な胎土を持ち、釉色は透明に近い白色である。底部は無釉で、削り出し蛇の目高台を持つ。313は乳白色の施釉がなされ、底部は無釉である。削り出し蛇の目高台を持つ。314は椀口縁部であり、口縁端部より下と口縁内面にヘラケズリがなされる。317は椀口縁部であり、内面に一条の沈線を巡らす。釉色は暗緑色を呈する。同安窯系の製品か。324は紀伊型土釜である。329は土釜鍔部である。下方に326は瓦質土器浅鉢の脚部である。中空である。327は陶器鉢の底部であると思われる。内外面共に回転ナデが施される。胎土は暗灰褐色で、白色砂粒を多く含む。産地は不明である。真蛸壺には肩部に段を有するもの（340、344）と有しないものがある。344は土坑底部に横倒しの状態で出土した。土錘には棒状のもの（337）と大型のものがあり、339は成形時の圧痕を強く残す。348は均整唐草文軒平瓦である。顎部の粘土を貼り付ける際に凹凸面共に非常に強いナデが施されている。軟質である。347、350は平瓦である。347は凹面に模骨痕、凸面には縄タタキが認められる。胎土に非常に多くの砂礫を含み、軟質である。350は凹面糸切り、布目、凸面にはハナレズナが認められる。硬質である。349は丸瓦である。凹面に布目が認められる。軟質であり摩滅が著しい。312は漆製品である。暗赤褐色を呈し、暗褐色の圏線を２条以上巡らす。素地を失し、皮膜として残ったもので、現状において短軸方向に湾曲することから椀などの底部付近であるとも考えられる。

２．採掘土坑２（第56・57図、ＰＬ．１・19・24）

Ｃ５区南端において確認された。長辺11.0m、短辺6．5m、深さ0.2～0.3mを測る凸字状を呈する。採掘土坑１と同様に重なり合う土坑群と捉えることができる。南東部において窯１を切っている。同様の不定形の土坑が東側のＣ４区にもおいてもみられ、大規模に採掘が行われた

ことが分かる。

埋土から多くの遺物が出土した。320、323は青磁椀である。320は外反する口縁部を持ち、体部内面には沈線及び草花文が見られる。灰白色の胎土を持ち、釉色は暗緑色である。323は角高台を有し、全面施釉の後、底部から体部下半を掻き取る。釉薬との境が赤く発色する。薄灰褐色の胎土を持ち、釉色はかすんだ緑色を呈する。共に龍泉窯系Ⅲ類。328は紀伊型土釜である。口縁端部を上方に拡張する。330、332、334は須恵器鉢である。332、334は口縁端部を上下に拡張している。333は片口を持つ。331は瓦質土器甕である。口縁端部を外方向に強く曲げる。外面にはタタキが施される。火中し赤褐色を呈する。332は瓦質土器すり鉢である。外面には粗いケズリが施され、内面にはスリ目が認められる。良く使われたものか、かなり摩滅している。343、345、346は土師質真蛸壺である。体部と肩部の境が明瞭でない。

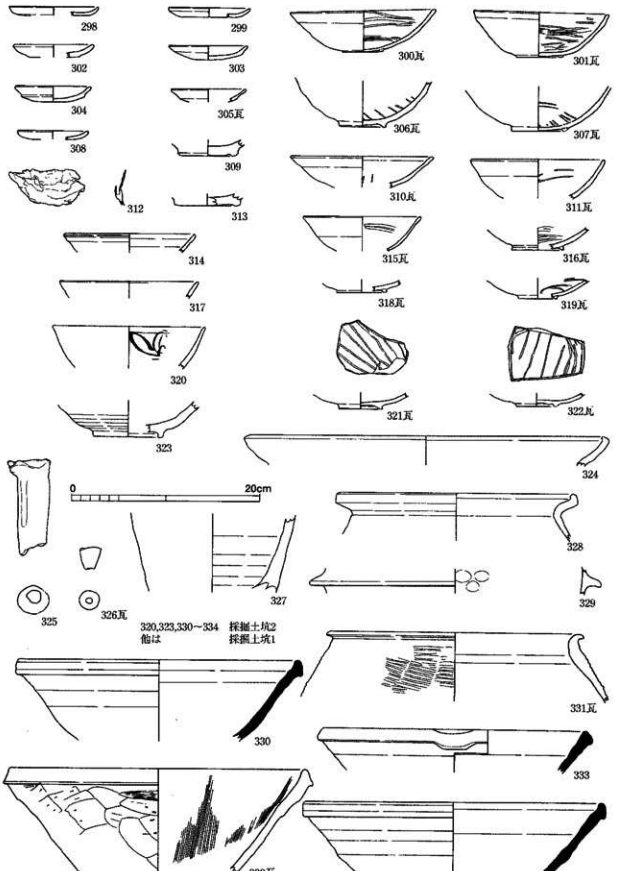


第55図　採掘土坑１平面図及び断面図

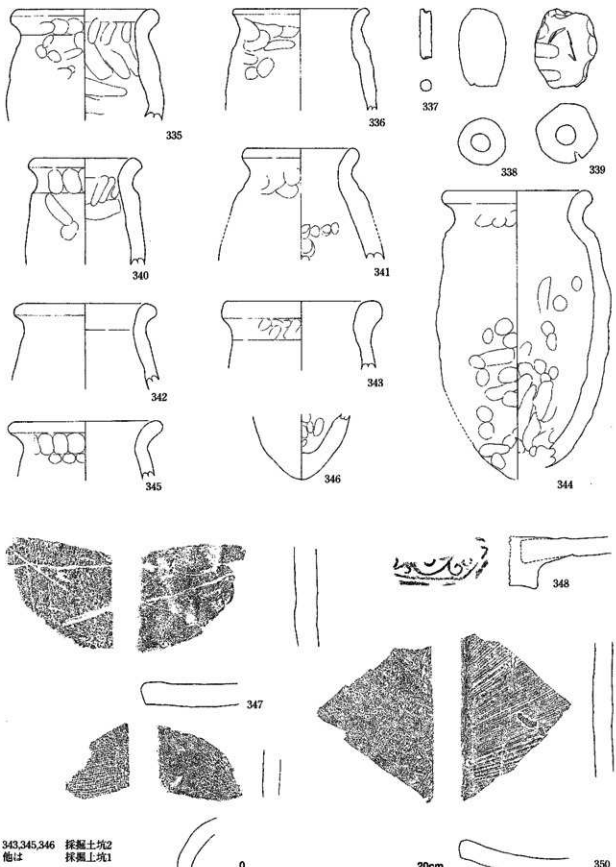
以上、採掘土坑１、２共に出土遺物にはかなりの時期差がある。Ｃ５区の他の遺構の状況から考えると、時期的に遡る遺物については、採掘土坑掘削に際して破壊された未知の遺構に伴うものであろう。採掘土坑そのものは14世紀後半に属するものと考えられる。

第９節　溝

１．溝１（第58・59図、ＰＬ．１・19・20・24）



第56図　採掘土坑１、２出土遺物①



343,345,346　採掘土坑2
他は　採掘土坑1

第57図　採掘土坑１、２出土遺物②

A３区、A１区、B１区、B２区において確認された。延長86.0m、幅3.6m、深さ0.7～0.8mを測る直線状に伸びる溝である。溝の方向はN－18～20°－Eに向け、ほぼ直線である。断面形状は逆台形を呈し、底部は概ね平坦である。底部標高は北端において約4.6m、南端においては約4.2mを測り、北から南へ向かって高度を下げる。埋土の状況は溝の南北で大きく異なり、北半部においては褐色系粘土やシルトが順次堆積した様相を示すのに対し、南半部においては砂礫と砂が互層をなす。その変換点を平面的に押さえることはできなかったが、北側の堆積状況だけをみると、活発な流水状態にあったとは考えられない。また底面の標高からは北から南に向かって流れていたものと考えられるが、そうすると地形本来の傾きとは逆になる。わざわざ逆に傾ける必要があったのか、調査区内の状況がたまたまそうであったのかは分からない。

埋土には平安時代を中心とする遺物が含まれていたが、量的にはあまり多くない。かつ細片が多い。遺物には土師器坏（352、356）、皿（360～362）、甕（364～374）、鉢（376）、壺（375）、土釜（377）のほか須恵器坏（351、352）、黒色土器椀（353、354、357、358、363）がある。352は口縁下部に強いヨコナデを施し、稜線をなす。土師器甕は口縁形態によって、端部を内側に折りまげるもの（365、367）、丸くおさめるもの（366、369）、平坦面をなすもの（370、371）などに分けることができる。367、371、372、373は頸部外面に縦方向、口縁内面には横方向のハケメが見られる。375は外面にユビオサエの痕跡が見られる。351、355はいずれも断面方形の高台を有し、351は外方向にわずかに開く。黒色土器はA類ばかりであり、B類は出土していない。353、354は内面にヘラミガキが見られる。高台もバリエーションがみられ、358は細くハ字状に開き、359は高く細い輪高台、363は断面三角形に近い。これらの遺物により、溝１は10世紀中葉以降に埋没したものと考えられる。

２．溝２、柵１（第58・60図、ＰＬ．20・24）

Ｃ２区西端部において確認された。検出長8.0m、幅3.8m、深さ0.7mを測る直線状の溝である。溝の方向はN－25°－Wへ向ける。断面形状は皿状を呈する。埋土は大きく４層に分けることができ、上位にシルトなどが堆積し、最下層には砂礫が厚0.15mで認められる。埋土から少量の遺物が出土している。378は黒色土器Ａ類坏であり、379は鈎鐘型蛸壺である。378には細く、断面三角形に近い高台を貼り付ける。

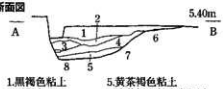
これらの遺物より溝２は溝１とほぼ同時期のものと判断される。両者は規模的にも近似することから、互いに接続するものである可能性が考えられる。

溝２の西側に隣接して、等間隔で並ぶピットが確認された。径0.5～0.6m、深さ0.15～0.3mを測る円形もしくは不整円形を呈し、径0.1mの柱痕跡を有する。ピット間の距離は2.5m等間である。列の方向はN－19°－Wを向き、溝２とは完全には平行しない。溝２西上端からの距離は0.2～1.0mを測る。ピットからは遺物が出土しておらず、また確認されたのも２間分にとどまるため確証は得られないが、溝２に伴う柵もしくは塀であると考えることができる。

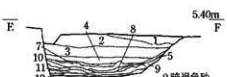
３．溝３（第58・60図、ＰＬ．１・24）

Ｂ２区中央部北寄りにおいて確認された。東西端及び北端が調査区外へと伸び、南辺を確認し

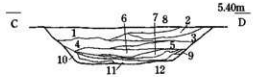
溝1断面図



1.黒褐色粘土
2.灰黒色土
3.明赤褐色粘土
4.茶褐色粘土
5.黄茶褐色粘土
6.淡黄褐色粘土(地山)
7.明橙色粘土(地山)
8.明橙色砂礫(地山)

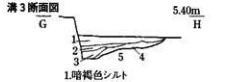


1.暗褐色土
2.灰褐色砂礫
3.黄褐色砂礫
4.暗灰色砂礫
5.暗黄褐色砂
6.淡黒褐色砂
7.淡黄褐色砂
8.明橙色砂と灰色砂の互層
9.暗褐色砂
10.灰黄褐色砂
11.黄褐色砂
12.暗灰黄褐色砂
13.暗黄褐色砂礫(地山)



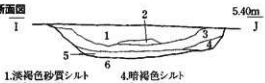
1.暗褐色土
2.暗褐色礫混じり土
3.暗褐色シルト
4.灰褐色砂礫
5.黄褐色砂礫
6.暗灰色砂礫
7.暗黄褐色砂
8.淡茶褐色砂
9.暗黄褐色砂
10.暗褐色十混暗褐色砂
11.黄褐色礫砂
12.暗黄褐色砂礫(地山)

溝3断面図

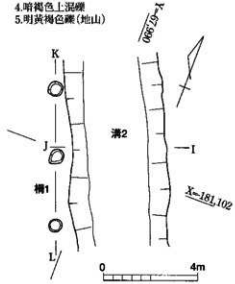


1.暗褐色シルト
2.褐色砂
3.明褐色シルト
4.暗褐色上混礫
5.明黄褐色礫(地山)

溝2断面図

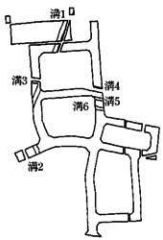


1.淡褐色砂質土
2.淡褐色砂質土
3.暗褐色シルト
4.暗褐色シルト
5.褐色十混礫
6.黄褐色土混礫(地山)

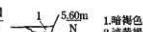


溝2及び溝1平面図

溝1断面図



溝4断面図

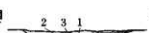


1.暗褐色シルト(黄褐色ブロック含)
2.淡黄褐色シルト(地山)

溝5断面図

1.暗褐色礫混シルト(黄褐色ブロック含)
2.淡黄褐色礫混シルト
3.暗黄褐色礫混土(地山)

溝6断面図



1.灰褐色土(耕作土)
2.黒褐色土
3.暗褐色シルト
4.暗褐色礫混シルト
5.褐色礫混土(地山)

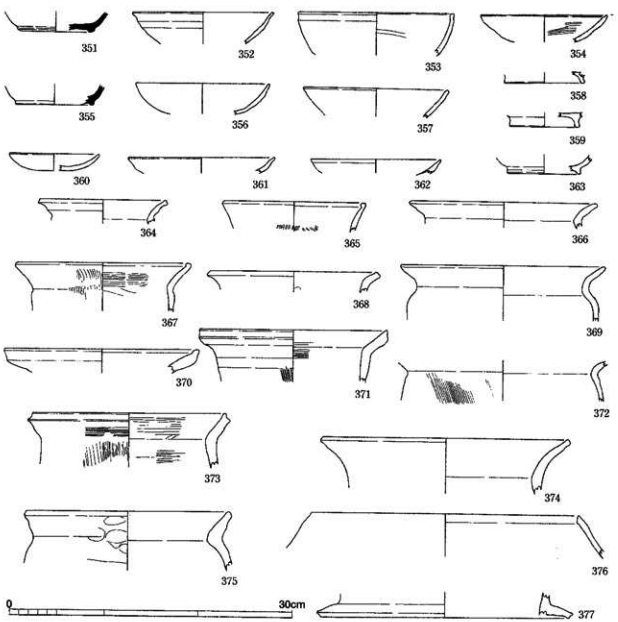
※A-B間、E-F間、C-D間、G-H間、M-N間断面図はPL.1に対応する。
※O-P間、Q-R間断面図は第13図に対応する。

第58図　溝1～6及び橋1

たにとどまる。検出長7.0m、最大幅2.0m、深さ0.5mを測る直線状の溝である。溝の方向はE−5°−Sに向ける。断面形状は船底状を呈する。埋土は最下部に砂礫を含むが、ほとんどがシルトである。溝1を切っているが、切り合いは明確でない。調査区を横断する現況水路とほぼ平行していると考えられ、後述する溝4と接続する可能性が高い。　埋土より瓦質土器三足（386）が出土している。

4．溝4（第58図、PL．1）

B4区中央部南寄りにおいて確認された。東西及び南端が調査区外へと伸びる。トレンチ南端において遺構北辺が確認されたにとどまり、規模等については必ずしも明確ではない。検出長7.0m、最大幅0.5m、深さ0.2mを測る直線状の溝である。溝の方向はE−10°−Sへ向ける。現



第59図　溝1出土遺物

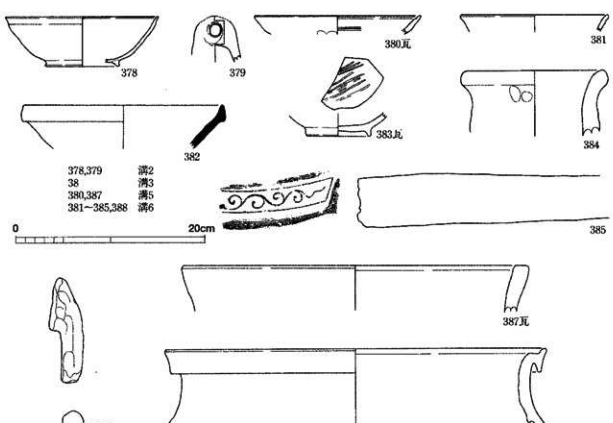
況水路が南側を東西に伸びている。遺物は出土しなかった。

5．溝5（第13・58・60図、PL．1・24）

B4区南部において確認された。検出長7.0m、幅1.0～3.0m、深さ0.1～0.35mを測る。直線状に伸びるが南辺中央部が少し湾曲している。溝の方向はE－10°－Sへ向ける。断面形状は逆台形であるが、北側にテラス状の平坦面を持つ。底部は概ね平坦であり、西がわずかに高い。埋土は2層に分けることができ、いずれも褐色系のシルトである。埋土より瓦器椀（380）、瓦質土器浅鉢（387）が出土している。380は口縁内面に圏線状のヘラミガキが見られる。387は口縁端部が平坦面をなす。摩滅のため詳細は不明である。

6．溝6（第13・58・60図、PL．1・20・24）

B4区南端において確認された。検出長8.0m、幅2.3m、深さ0.25mを測る直線状の溝である。溝の方向はE－10°－Wへ向ける。断面形状は浅い船底状を呈する。底部は概ね平坦であり、西がわずかに高い。埋土は最下部に礫を含むが、ほとんどが褐色系シルトである。南東壁に接するように多くの礫や遺物が出土した。遺物は瓦器椀（383）、白磁椀（381）、須恵器鉢（382）、陶器甕（368）、土師質真蛸壺（384）、軒平瓦（384）である。383は断面台形の高台を有し、見込みに平行線条のヘラミガキが見られる。381は灰白色の胎土を持つ。釉色は透明に近い白色である。



第60図　溝2、3、5、6出土遺物

全面施釉の後、口縁端部を掻き取り口禿げとする。382は口縁端部を上下に拡張する。368は口縁端部を上下に大きく拡張し、断面N字状を呈する。常滑か。384は体部と頸部の境界が明瞭でない。頸部にユビオサエが見られる。385は均整唐草文軒平瓦である。文様の表出は太く力強い。直線顎であり、凹面には糸切り痕と布目、凹面には糸切り痕とハナレズナが認められる。硬質である。これら遺物の年代は、12世紀末と考えられる軒平瓦を除くと、おおよそ13世紀後半から末に属するものと考えられる。

主要参考文献

森　　隆「黒色土器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会（1995）
尾上　実・森島康雄・近江俊秀「瓦器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会（1995）
山下峰司「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会（1995）
山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会（1995）
森田　稔「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会（1995）
渋谷高秀「第４章　出土遺物の観察」『野田・鷹巣地区発掘調査報告書』和歌山県教育委員会（1985）
香原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会（1982）
木戸雅寿「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会（1995）
久保智康『中世・近世の鏡　日本の美術３』至文堂（1999）
窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社（1997）
和泉丘陵内遺跡調査会『万町遺跡』（1991）
白石太一郎『奈良県宇陀地方の中世墓地』『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』（1993）

第4章　まとめ

調査の結果をもとに、若干の考察を行い、まとめとしたい。

溝1及び溝2は、出土遺物により10世紀中葉以降に埋没したと考えられる大規模な溝であった。黒色土器B類を含まないことから、ある程度埋没時期を限定することができる。また調査区の北西には、溝1とほぼ重なる地割が、調査区北端より長さ250mにわたって残る。また溝1、2が連続するものである可能性を述べたが、その想定されるラインとほぼ同じ円弧を描く地割が調査前には明瞭に残っており（第3図）、これらの地割が溝を踏襲したものと仮定すれば、溝の総延長は350mを超える。用途としては、他に同時期の遺構が皆無に等しいことから、区画等とは考え難く、灌漑用水路と考えるのが妥当であろう。

第3表　掘立柱建物及び溝の軸方向

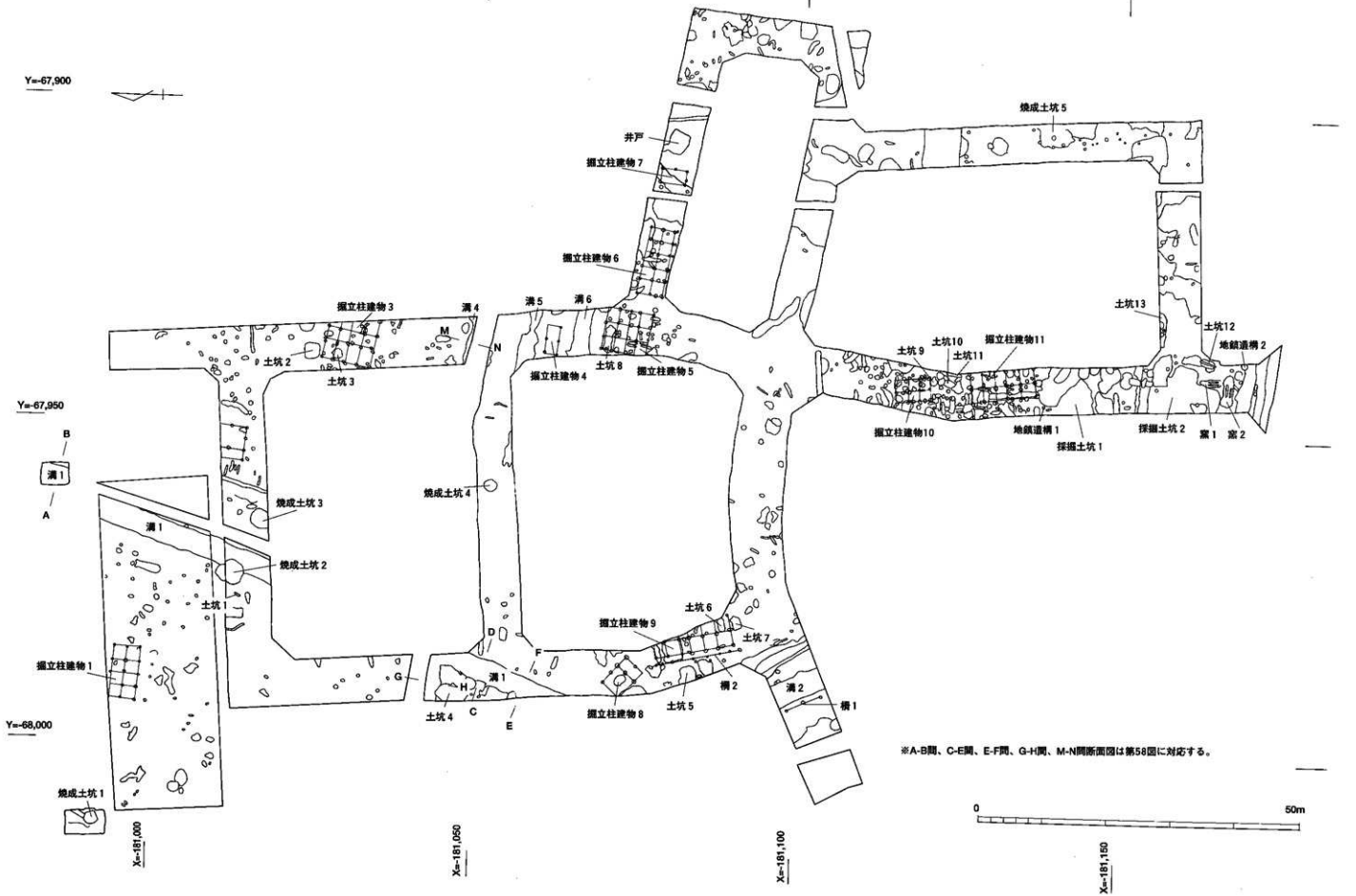
主軸方向	掘立柱建物	溝	グループ
N20° E		1	−
N12° E	3		①
N10° E	1, 4, 5, 6	4, 5, 6	
N4° E	2		
N5° E		3	②
N6° E	7		
N10° W	9, 10, 11		③
N25° W	8		④
N40° W		2	−

掘立柱建物については、時期的な指標となる遺物が乏しく、明確さを欠く。掘立柱建物5や6に時期的に遡る遺物が見られるが、概ね13世紀代のものと考えてよさそうである。次に建物主軸方向による検討を加える。確認された掘立柱建物及び溝の主軸方向にはN−20°−EからN−40°−Wがあり、それぞれの分布は第3表のとおりである。このうち時期的に異なる溝1、2を除き、軸方向が5°以内の僅差に収まるものを抽出すると、①から④までに分けることができる。①は溝6の出土遺物により13世紀後半から末に位置づけられ、②は遺物が少ないが、溝3より15世紀代の遺物が出土している。③は掘立柱建物9及び11出土遺物により13世紀前半と考えられる。④は13世紀後半以降と考えられる。上記のことから、③→①→④→②という変遷を考えることができる。上位3グループが属する13世紀代が集落の中心であり、それぞれの建物規模も概ね共通している。

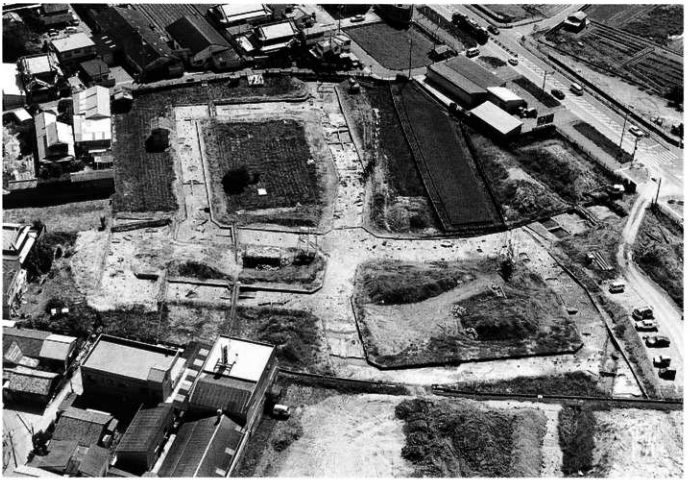
土坑に関しては、大きくA期（13世紀前半）、B期（13世紀後半〜14世紀）に分けることができる。A期には土坑1、2、3、8、9、10、12が、B期には土坑4、5、6が属し、土坑7についてもA期の遺物が出土しているが、隣接する土坑6と同様にB期に属する可能性がある。

焼成土坑及び窯に関しては、主要な遺物が土師質真蛸壺であり、現時点での時期決定には、自ずと限界が生ずる。粘土を採掘したと考えられる採掘土坑が14世紀後半に属することから、同時期に操業された焼成土坑が存在する可能性も充分に考えられるが、上述のように、多くの遺構が13世紀代に属することを踏まえれば、焼成土坑に関しても13世紀代に属するものと考えるのが妥当であろうか。今後、土師質真蛸壺の形態的編年を構築し、再考する必要がある。

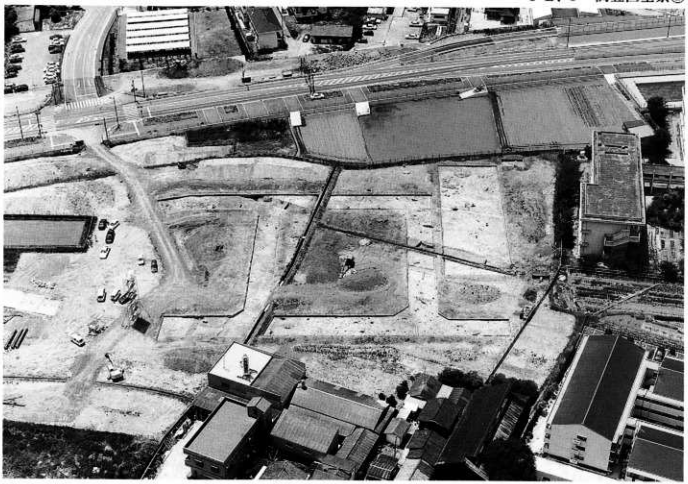
以上、13世紀代を中心とする集落が展開したことが明らかとなったが、建物規模が総じて大きく、土坑墓に和鏡や灰釉陶器を伴うこと、また特殊な火葬施設などを用いていることなど、一般的な集落とは一線を画すものであった。今回、掲載することのできなかった遺構を含め、これらについての歴史的評価を試み、再度それらを公表したい。


Y=-67,900
Y=-67,950
Y=-68,000
X=-181,000
X=-181,050
X=-181,100
X=-181,150
井戸
掘立柱建物7
掘立柱建物6
掘立柱建物3
溝4
溝5
溝6
土坑2
土坑3
掘立柱建物4
土坑8
掘立柱建物5
焼成土坑5
土坑13
土坑12
地鎮遺構2
土坑9
土坑10
土坑11
掘立柱建物11
掘立柱建物10
地鎮遺構1
採掘土坑1
採掘土坑2
窯1
窯2
溝1
焼成土坑3
焼成土坑4
焼成土坑2
土坑1
掘立柱建物1
焼成土坑1
掘立柱建物9
土坑6
土坑7
溝1
土坑4
掘立柱建物8
土坑5
溝2
構2
構1
※A-B間、C-E間、E-F間、G-H間、M-N間断面図は第58図に対応する。
0
50m

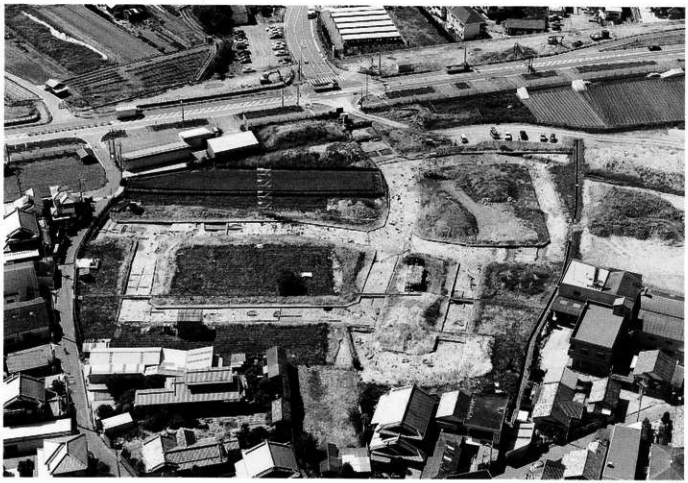
Ⅰ区全景（北から）



Ⅱ区全景（北から）



Ⅰ区全景（東から）



Ⅱ区全景（東から）

A1区（北東から）

B3区（南西から）

C1区（北西から）

B4区（南から）

C２区（東から）

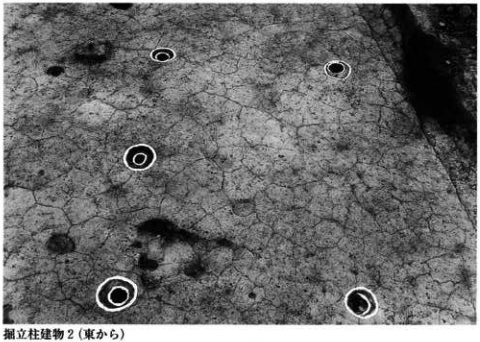
C３区（北から）

C４区（北西から）

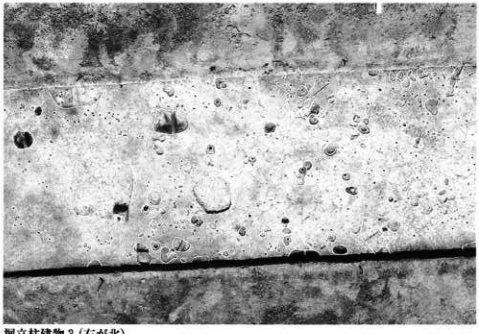
C５区（北東から）

B 4 区上層遺構（南から）

掘立柱建物 1（西から）



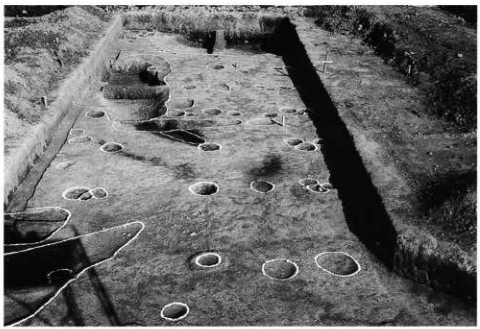
掘立柱建物 2（東から）



掘立柱建物 3（右が北）

掘立柱建物4、5・構5、6（南から）

掘立柱建物6（南から）



掘立柱建物6（西から）

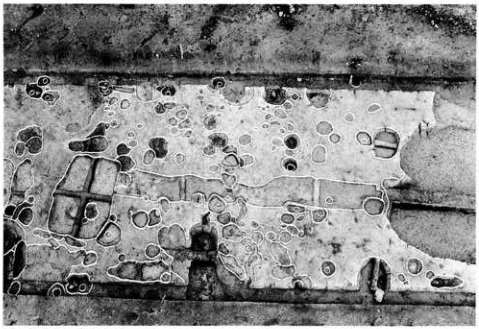
掘立柱建物7（南東から）

掘立柱建物８（南から）

掘立柱建物９・欅２（南から）

掘立柱建物９・欅２（東から）

掘立柱建物10（南から）



掘立柱建物11(西から)

地鎮遺構 2 (東から)

井戸 (北西から)

土坑 1 (南から)

土坑2（南西から）

土坑3（南から）

土坑3遺物出土状況（東から）

土坑4（北から）

土坑4遺物出土状況（南から）

土坑5（西から）

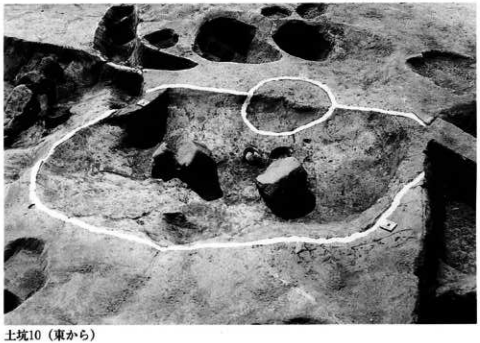
土坑5遺物出土状況（北から）

土坑6（東から）

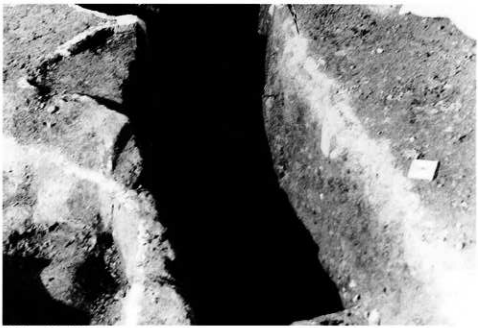
土坑7（西から）

土坑8（南東から）

土坑9（東から）

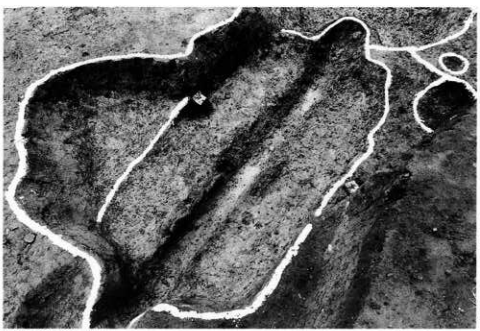

土坑10（東から）

土坑10遺物出土状況（北から）



土坑11（南から）

土坑12（北から）



同左（南東から）

土坑13（南西から）

焼成土坑１（南から）

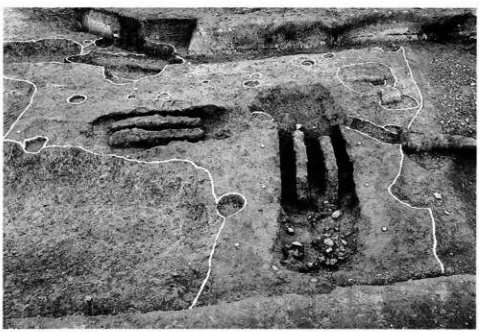
焼成土坑２（北東から）

同左遺物出土状況（南から）

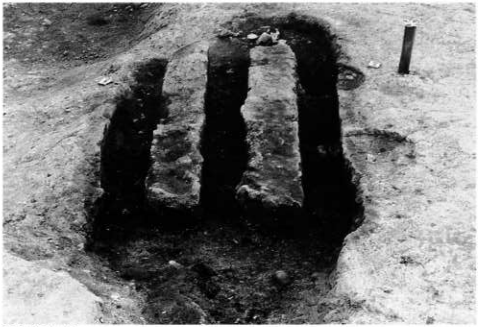
焼成土坑3（北から）

焼成土坑4（北から）

焼成土坑5（南東から）



窯1、2（西から）



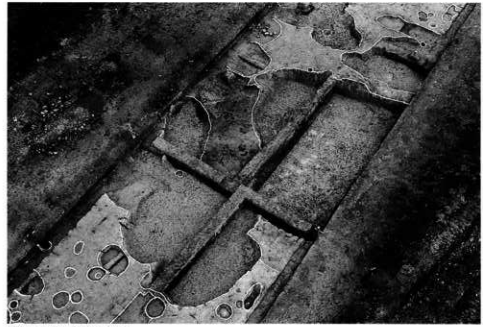
窯1（南から）

窯2（東から）

窯1 焔道内遺物出土状況（南から）

窯2 焔道内遺物出土状況（西から）

窯２貼床検出状況（東から）



採掘土坑１（北西から）

採掘土坑１（南西から）

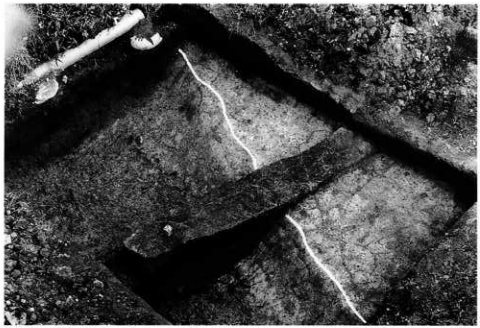
同左遺物出土状況（南から）

採掘土坑２（北西から）

溝１（A1区、北東から）

溝１（B２区、南西から）

同左堆積状況（南から）

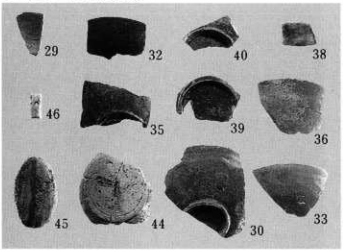


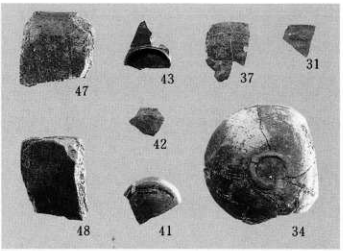
溝１（Ａ３区、北東から）

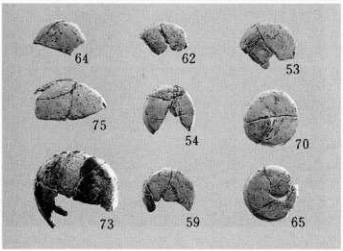
溝２・欅１（北東から）

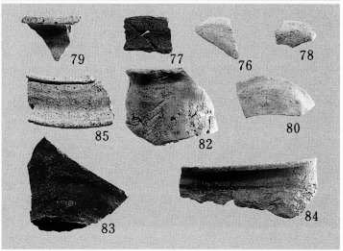
溝２・欅１（南から）

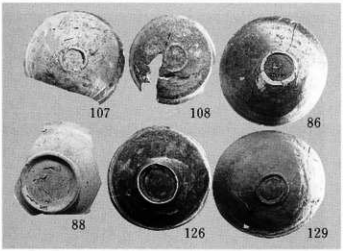
溝６遺物出土状況（北西から）

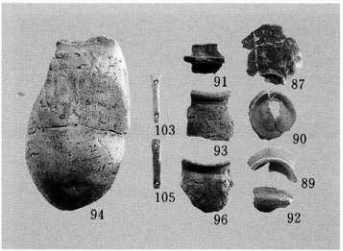

29
32
40
38
46
35
39
36
45
44
30
33

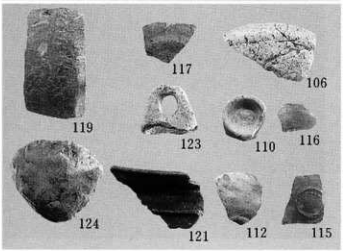

47
43
37
31
42
48
41
34

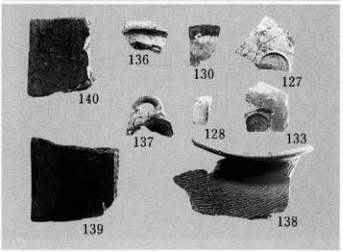

64
62
53
75
54
70
73
59
65

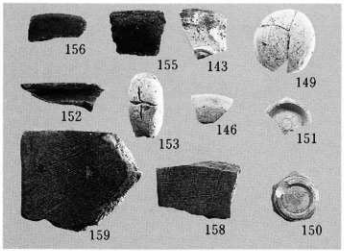

79
77
76
78
85
82
80
83
84

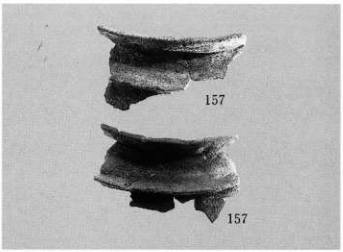

107
108
86
88
126
129

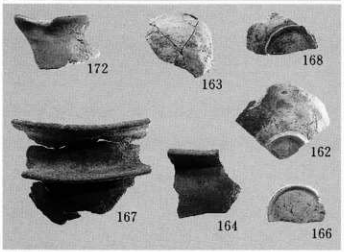

91
87
103
93
90
94
105
96
89
92

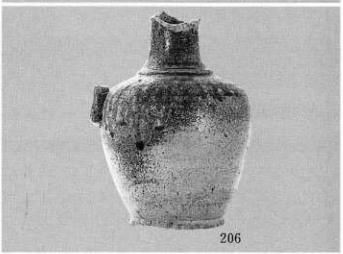

117
106
119
123
110
116
124
121
112
115

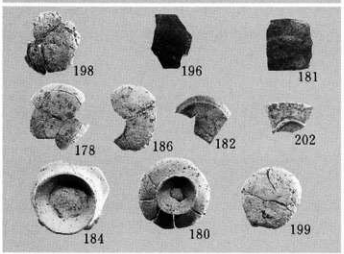

136
130
127
140
137
128
133
139
138

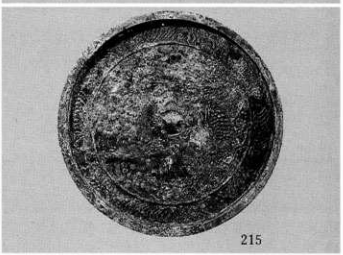

156
155
143
149
152
153
146
151
159
158
150

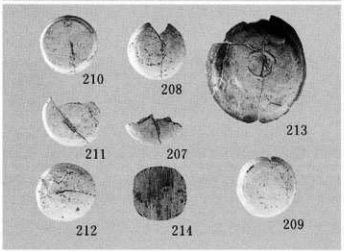

157
157

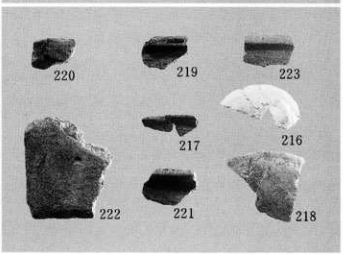

172
163
168
162
167
164
166

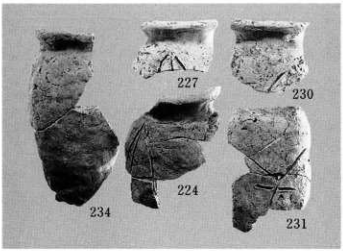

206

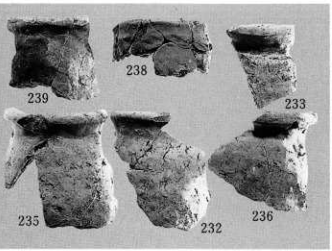

198
196
181
178
186
182
202
184
180
199

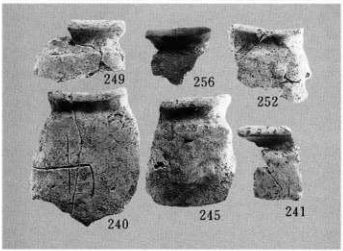

215

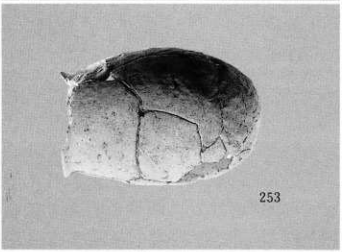

210
208
213
211
207
212
214
209

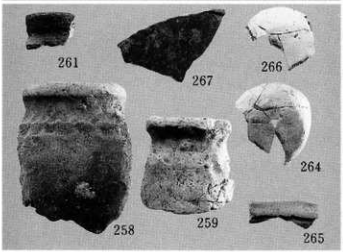

220
219
223
216
217
222
221
218

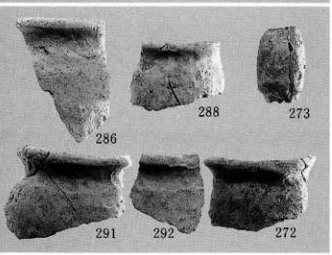

227
230
234
224
231

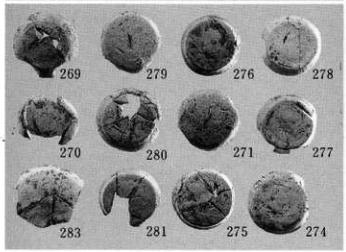

239
238
233
235
232
236

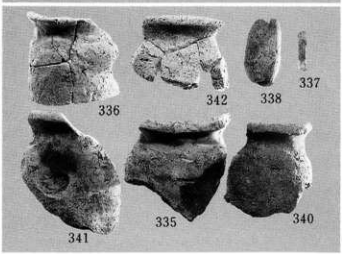

249
256
252
240
245
241

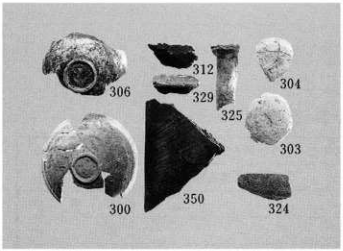

253

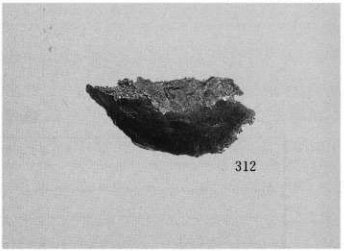

261
267
266
264
258
259
265

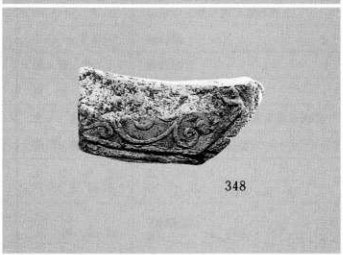

288
273
286
291
292
272

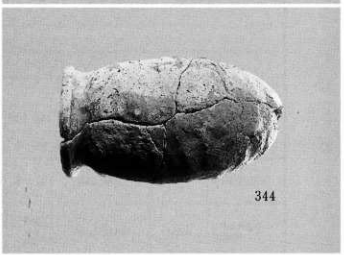

269
279
276
278
270
280
271
277
283
281
275
274

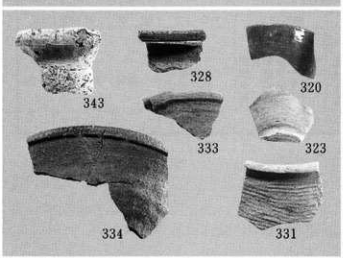

342
338
337
336
335
340
341

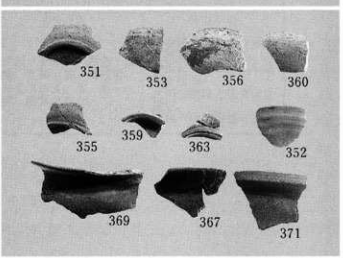

306
312
329
325
304
303
300
350
324

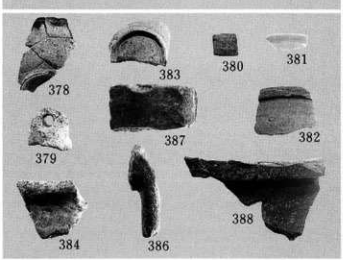

312

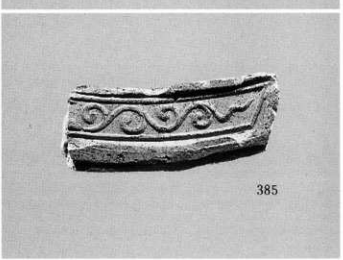

348


344


343
328
320
333
323
334
331


351
353
356
360
355
359
363
352
369
367
371


378
383
380
381
387
382
379
384
386
388


385

報告書抄録

ふりがな	えびすばたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	戎畑遺跡発掘調査報告書
副書名	−
巻次	−
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書
シリーズ番号	第45集
編著者名	城野博文
編集機関	泉南市教育委員会
所在地	〒590−0592　大阪府泉南市樽井1丁目1番1号　Tel.0724−83−0001
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
戎畑遺跡 えびすばた	大阪府泉南市 樽井	27228	EB	34度 22分 07秒	135度 15分 29秒	960223〜961007	3,245	土地区画整理 共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
戎畑遺跡	集落	平安時代 鎌倉時代	掘立柱建物、土坑、焼成土坑、窯、採掘土坑、溝など。	須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、土師質真蛸壺、瓦、温石、和鏡、漆製品など。	平安時代の漁獲用水路を確認。 13世紀を中心とする集落を確認。 真蛸壺焼成土坑や窯を確認。 和鏡や灰釉陶器の出土。

戎畑遺跡遺跡掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書　第45集

2005年３月31日

編集・発行　大阪府泉南市教育委員会
泉南市樽井１丁目１番１号
Tel.0724－83－0001

印　　刷　有限会社 ヌノタ印刷工房
泉南市新家4509－4.1－205
Tel.0724－80－2760